

Reports of INS



Iwate Network System

**No.34
2025**

Iwate Network System

目次

◆ 巻頭言			
愛され、応援される組織になるには			
岩手大学理事（研究・地域連携担当）・副学長	水野 雅裕	・・・	1
◆ 寄稿			
INS と私	SBIM 代表 佐藤 利雄	・・・	3
共同研究員としての軌跡とこれから			
岩手大学研究支援・産学連携センター 釜石市共同研究員	結城 伸予	・・・	6
JST「共創の場形成支援プログラム」（地域共創分野・育成型）農村と都市との豊かな結びつきを育む『いわて畜産テリトリー』創造拠点形成プロジェクト			
拠点運営機構設置責任者 岩手大学理事・副学長	水野 雅裕	・・・	9
INS と私	株式会社ニュートン 沼田 秀彦	・・・	13
日本は 120 人の縄文人からはじまった ―工学研究者の考える古代日本史―			
	岩渕 明	・・・	16
◆ ニュース			
齋藤徳美先生と(株)アイカムス・ラボが「岩手日報文化賞」受賞		・・・	18
◆ 会則		・・・	19
◆ 役員		・・・	21
◆ 2024 年度事業報告		・・・	22
◆ 2024 年度決算		・・・	31
◆ 2025 年度 INS 事業計画		・・・	33
◆ 2025 年度予算		・・・	34
◆ 研究テーマの紹介		・・・	36
◆ 研究会一覧		・・・	39
◆ 研究会活動報告		・・・	40
◆ 個人会員名簿について		・・・	56

愛され、応援される組織になるには

岩手大学理事（研究・地域連携担当）・副学長 水野雅裕

“岩手大学はよりよい未来を創造する「地域の知の府」「知識創造の場」として、地域に頼られ、尊敬され、愛される大学となる。”これは、岩手大学が“岩手大学ビジョン 2030”として掲げた大目標です。私はこのビジョンに触れるたび、大谷翔平選手が頭に浮かびます。今や、世界中の人々から尊敬され、愛される存在になった大谷選手ですが、なぜこれほどまでに尊敬され、愛されるのでしょうか？周囲から無理だと言われながらもぶれることなく二刀流にチャレンジし、幾度も怪我を乗り越え、さらには通訳との金銭トラブルをも乗り越え、それらをすべて力に変えていく姿には彼の倍以上も歳を重ねた私でさえ憧れるようなものを感じてしまいます。10年で1000億円超の契約と聞けば嫉みの眼差しを向けられてもおかしくはありません。しかし大谷選手に対しては嫉みという感情は全く湧いてきません。大谷選手がホームランを打つと何故か自分事のように嬉しくなり、その日一日気分よく過ごすことができる。だからますます応援したくなる。少し前まではそのように感じるのは自分だけかなあと感じていましたが、多くの人が自分と同様の感情を抱いていることに気が付きました。大谷選手がホームランを打っても自分にとって物理的に何の得にもならないのに不思議です。先日高齢で亡くなった私の父も亡くなる直前まで大谷選手から元気をもらっているようでした。大谷選手は個人であって組織ではありませんが、愛され、応援される存在になるためのヒントを示してくれているように思います。

私は、現在の役職に就く直前まで、岩手大学鳥人間サークル「デコレ」の顧問を務めていました。琵琶湖で開催される鳥人間コンテストに2015年と2018年に出場した際には多くのINS会員の皆様に応援していただきました。応援していただいた皆様に改めて深く感謝申し上げます。このサークルの顧問を務めていたとき、愛され、応援されるチームになるにはどうすればよいのだろうかと考えていました。まずは多くの人にチームの活動を知ってもらふ必要があると考え、広報活動に力を入れました。ホームページ、SNSでの情報発信、テレビ局への投げ込み、いろいろなイベントでのPR活動を積極的に行いました。ではそこで何を伝えるかです。鳥人間コンテストは手作りの飛行機でどれだけ遠くに飛べるかを競う競技です。であれば、作ろうとしている機体の特徴を詳しく伝え、長距離飛行を期待していただくことで応援者を増やせるか？いやいや、本当に実力のあるチームであれば説得力があるでしょうが、我々のチームは新参者であり、経験も実績も何もありません。伝えられるのは学生の情熱だけです。でも、この“学生の情熱”は広報活動において大きなパワーになります。私も、学生の情熱に動かされてしまった応援者の一人です。留年を厭わず何が何でも出場したいという個性の強い学生が現れ、次にそれをフォローする学生が現れ、私もとうとう乗せられてしまいました。自分も学生時代にチャンスがあればやってみたかったなあという共感があったかもしれません。いろいろな失敗を繰り返しましたが、結果的には彼らに徹底的に関わったことで私は“一生の思い出”という宝物をもらいました。対象となる人や組織の行動や情熱に共鳴し、失敗も含めて自分事のように感じられたとき、人は対象を心から応援したくなるのかもしれません。

岩手大学が地域に頼られ、尊敬され、愛される大学になるためにはどうすればよいのだろうかと考えます。これはなかなかの難問です。周囲から愛される存在になるためには、まずは大学構成員が自分の大学に誇りを持ち、愛せるようにならなければなりません。一方で、大学の研究室が個人商店に例えられるように、個々の教員の専門分野は多岐にわたっていて活動はバラバラです。基本的に活動がバラバラという点が企業とは大きく異なっています。バラバラというより多様性があると表現した方がよいですね。大学はイノベーションの源泉とならなければならないので、いろいろなアイデアを出すために多様性が必要です。多様性を持ちながらも、大学総体としてのアイデンティティを持ち、構成員がそれを認識して一体感を持つ組織になることが重要だと思います。今、国は地方国立大学に対して地域活性化への貢献を大いに期待しています。それができるかどうかで地方国立大学の存在意義が問われているように感じます。少子高齢化による地域経済の衰退、税収不足による行政サービスの質の低下、老朽化したインフラ、コミュニティ崩壊の危機、気候変動による農林水産業への影響、などなど、地方には課題が山積しています。こうした課題に対し、大学も積極的にアイデアを出して貢献して欲しいというのが国の考えです。歴史を振り返れば、岩手大学の前身である盛岡高等農林学校は、度重なる冷害と凶作に見舞われて疲弊しきっていた東北地方の農民や農村を救うことを目的に設立されました。その地域貢献の精神が岩手大学の根底にあるアイデンティティであり、すべての構成員がそれを頭の片隅に置きながら行動するようにしたいものです。

昨年度、岩手大学は地域協創教育センターを設置し、全学部の学生を対象とした共修プログラム「イーハトーヴ協創コース」を開設しました。盛岡高等農林学校の卒業生である宮沢賢治の想い「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」を受け継ぎ、“誰一人取り残さない持続可能な社会の実現を目指し、岩手で生きる、岩手と縁のある地域の多様な方々との協創活動を通じ、心の豊かさとイノベーションマインドを併せ持ち、高い専門性と実践力を兼ね備えたレジリエントな人材を育成する”のがこのプログラムの目標です。指定された正課科目の履修や地域課題解決プログラムなどの正課外活動に「地域協創マイレージ」を付与し、修了要件を満たした学生に認定証を授与する仕組みになっています。「イーハトーヴ協創コース」の必修科目である「地域協創入門」には、令和7年度は600名を超える学生から履修希望（岩手大学の1学年の学生数は約1000名なので6割以上）がありました。このプログラムを通して、将来、地域活性化に情熱を持って取り組んでくれる若者を一人でも多く育てることができれば大学にとって大きな喜びです。地域の皆様にも我々のこの取組みに関わっていただいて、若い学生の情熱に触れ、自分事のように思っただけで応援していただければ幸いです。

大谷選手と宮沢賢治に共通しているのは自分よりも他者（あるいは全体）の利益を優先する“利他の精神”です。岩手大学の構成員が地域に研究課題を求め、地域の皆様とのコミュニケーションや利他の精神を大事にして行動することで、地域に頼られ、尊敬され、愛され、そして応援される岩手大学になれると信じています。岩手大学にとってINSは地域の皆様と深くコミュニケーションし、信頼関係を構築するための大切な存在です。

40 年前花巻市にあった株式会社アドテックシステムサイエンス勤務時、「佐藤さんはいいね。札幌や仙台に出張できて」と、そして「また接待なんですよ」と。当時、岩手営業所の立場で、営業範囲が、北海道、東北 6 県の担当。もう一人の担当は、青森県、岩手県、秋田県、山形県、宮城県を担当し、私は福島県、宮城県、岩手県、北海道担当でした。主な訪問先は、全国展開を行っている商社訪問。単独で企業訪問もしながら、商社の方と企業訪問しながらマイクロコンピュータ開発ツールや、マイコンボードの販売でした。当時、マイコン開発はまだ地方での展開が無く、自社の製品販売は、自動化などの流れから徐々に売り上げを伸ばすことができました。1 回訪問で、50 万から 100 万の契約を結ぶと、どうしても商社と方々との接待が続きましたが、この接待で、技術営業を習得することになります。技術者として入社して、3 年後には営業に配属。営業のいろはも分からず、本社の指示で商社訪問を繰り返しながら、商社の方々と会話こそが、営業技術の基本として確立していきます。技術者は、最初から技術の売り込みを行うが、商社の方々は、「そういえば社長の好きな女優さんが」とか、「社長のお子さんが入学ですよ」とか、普段の会話から入っていく対応は、私にとっても新しい感覚に映りました。接待しながら「話題は女性週刊誌だよ」「普段の話題が無いと会話が續かないよ」と指導していただいたことが、最大の財産になりました。

平成 8 年 40 歳で、花巻市起業化支援センター勤務になり、アドテックシステムサイエンス勤務の経験が役立ってきます。起業化支援センターでは、入居条件が「産学官連携による新事業創出」、「起業家育成」が主な内容であり、大学などの研究者と企業の連携が必須でした。いろいろな方から、INS の存在を教えていただき参加した。最初の衝撃が、大学の先生のイメージが崩れ落ちたことと、岩手県庁、企業の方々の前向きな取り組み姿勢に驚きを隠せませんでした。と同時に、「これなら企業での経験した技術営業は使える」と感じたことも事実で、そして最大の共感「いつも飲んで騒ぐ」ことでした。こんな楽しい場を活用しないともったいないとの感じから、徐々に自分で研究会を主催していきますが、この経験が産学官連携の根幹を作ることの重要を感じた時期でもありました。研究会開催には、必ず交流会が開催され、この交流会の話題提供がどれだけできるかによって、研究会の継続もポイントになったのではないかと思います。INS の研究会は、専門性の高い技術を紹介し連携を深めていきますが、私の場合は、とりあえず参加した方々が、楽しく会話できる場の提供と考え、技術以外の話題をどのように交流会の会場で行うかを考えていました。（要はどのようにしたら楽しい宴会ができるかですね）。花巻市内での INS の研究会は、1 次会の交流会はホテルでの会食を行い、8 時から、双葉町のスナックへ移動し、「佐藤飲み」を行うことができれば、ほぼ皆さん喜んで帰っていただきました。どのような飲み方かはこの紙面では記述できない内容なので、何かの交流会の中でお話できます。記述できる内容としては、最初に 5000 円を支払えば、2 時間の間で、3、4 件のお店を回れるシステムです。

INS の研究会では、いろいろな経験をさせていただきました。花巻市内で「大学が面白い」を駅前のホテルで開催しました。参加者は高校生を考えていましたが、高校の先生からは、5、6 人参加できそうとの連絡をいただいていたので、予定通り開催しました。ところが、午前中にクラブ活動が長引きそうなので、参加出来ないと連絡をいただき、結局参加者ゼロを経験しました。丁度同じ日に、大学の先生方との会議もあり、落ち込んだ状態で会議に向かう途中、清水健司先生から「佐藤さん聞きましたよ。参加ゼロだったって。それならおめでとうですね」と、私は「何がおめでたいのですか」と伺ったら、清水先生より、「INS の最低参加人数 3 人を破っていただきました。おめでとうですよ」と。この会話こそ INS の精神を感じました。参加者を沢山求めるために、あまり興味のない方々を集めても、研究会が盛り上がることはなく、ここから参加人数にはこだわらなくなりました。今では、なるべく少ない人数で、中身の濃い意見交換ができる場の提供が重要と感じて、いろいろ研究会を開催しています。

INS に参加している方々は、何かの研究会に参加しているかと思います。今では 20 件ほどの研究会がありますが、最盛期の時は 50 近い研究会がありました。50 近い研究会が開催されれば、何か 1 つには参加したいテーマがありますが、INS の良さは、皆さんが行いたい内容を INS の主催で開催できることです。私も、「起業化研究会」「マーケティング研究会」「SDG s 研究会」「雇用研究会」の代表幹事を行っていますが、テーマに関係ない場合は、無理やり併せて開催してしまうこともあります。皆さんも、何か連携できそうな案件があればすぐに研究会を開催して、新しい事業創出など行ってみてはいかがでしょうか。参加者がゼロでも大丈夫ですよ。開催したことが残りますので、その時期がきたなら、再度研究会を開催してみましょう。

全国にいろいろと訪問させていただいていますが、INS ほど自由な場を提供できるところはあります。コロナで交流会が減少し、その流れがまだ続いています。SNS が進化し、現在は情報過多の時代になっていますので、SNS からの情報で世の中が動いている状況かもしれませんが、私は、本当の情報はその人本人との会話しか信用しないようにしています。初めて会う方と会話をして、本当の考えなどを伺わないと、産学連携などは進みません。

初めて会う方との会話の時こそ、技術だけの会話でなく、普段の話題からの会話ができるだけで、会話の場が変わってきます。

この訓練ができる場こそが、INS ですね。

今回、実践女子大学教授吉田雅彦先生と共著で、「これからを担う人たちへのエール ～起業・企業支援の実践～」を上梓させていただきました。私が JST を退職した令和 4 年の INS 総会の懇親会で、私と吉田先生が会話をしている間で決まりました。最初は私も何か書かなくてはならないのかなと思っていましたが、吉田先生から「文章は私が書きますので、佐藤さんは、今までの講演や投稿した文章を送ってください」とのことでしたので、自宅に戻り資料を送りました。その後、KNS の会場などで打ち合わせを行いながら、まとめていただきました。途中からは、20 以上の方からのコラムも掲載され、300 ページを超える本になってしまいました。これも、INS がなければできなかったことですので、本当に INS に感謝申し上げます。

この本により、私の活動が経済学の理論に沿って活動していたと伺った時は、いつも飲んで騒いでいただけで、理論に沿っているなんて、本当に信じられませんでした。でも、そのようですので、皆さんも「いつも飲んで騒ぐ会」を続けていけば、何かしら経済学の理論と対面する時期がくるかもしれませんね。その時こそ皆さん自身の理論を確立した時になりますね。

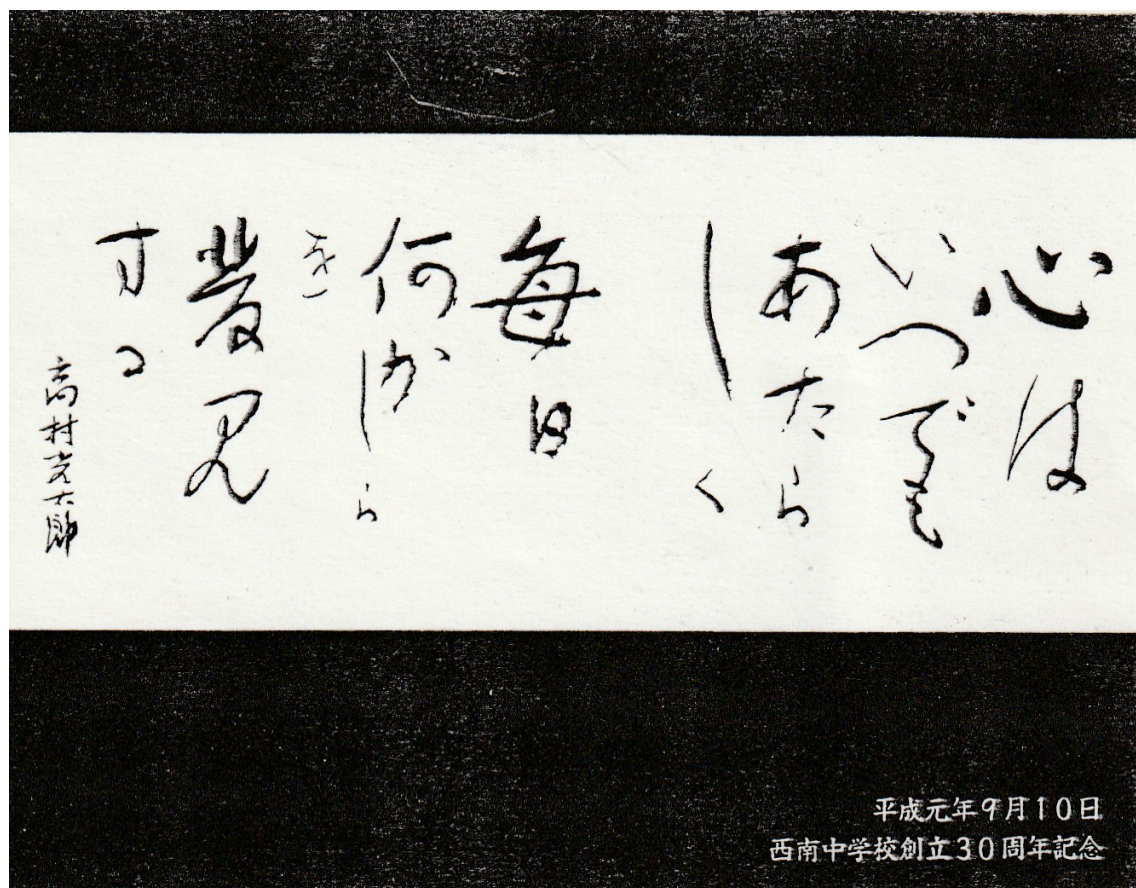
最後に私の活動を支えてくれた、高村光太郎先生の手紙を紹介します。

花巻市立西南中学校の時に、教えていただきました。

今思えば、社会人になってから、何か失敗や悩んだ時に、この言葉が次の活動のきっかけになっていたかもしれませんね。今では、地域活動も対応し始めていますが、毎日が何かしら新しい事を習得しているのではないかと思います。

何かしら新しい事にチャレンジしていけばワクワクすること間違いなしですね。

さて、今回の INS 総会後の交流会では、何か新しいことが発見できるか。



共同研究員としての軌跡とこれから

岩手大学 研究支援・産学連携センター
釜石市共同研究員 結城 伸予
(釜石市産業振興部企業立地港湾課)

1. 初めての異動は岩手大学へ

忘れもしない令和5年3月1日、総務課から届いた1通のメールが私の共同研究員としての始まりでした。内容は「岩手大学への派遣に興味はありませんか？」の一文。朝の9時頃に受信したメールを私が確認したのは、隣町での外勤から戻ってきた夕方4時頃だったと記憶しています。確認後、すぐに総務課に電話したところ「まったく返信がないから興味ないのかと思って、別のの人に打診しようと思っていたところだったよ。」と、電話口の担当者は笑いながらそう言いました。もしそうだったとすれば、私がいまキーボードをカタカタ打ちながら、このレポートを書いていることもなかったのでしょうか。

異動先として庁外への出向を提案されたその日の夜は、初めての異動に対する好奇心と新しい世界へのふわふわした気持ちにつつまれて、帰宅後すぐに眠りにつくことができました。そんな浮ついた気持ちでいたからでしょうか。異動の約3週間前に、私は自宅の階段から滑り落ちて足を骨折してしまいました。おそらく前代未聞であろう骨折した状態で、私は釜石市の6代目共同研究員として岩手大学に着任しました。大学、市役所の関係者の皆さまにおかれましては、その節はたいへんご心配をおかけしましたこと、改めておわび申し上げます。

2. 種をまいて育てていくということ

「これまで携わってきた福祉から産業振興、特に大学の共同研究員ということで、見る世界が180度変わった。初めてのことばかりではあるが、共同研究員の立ち位置や求められている役割を常に意識し、小さな疑問を大切に、周囲に相談しながら能動的に活動していきたい。」これは着任して1ヶ月が経った私の月次活動報告書の文面です。報告書を読んだ共同研究員OBの先輩からは「共同研究員1年目は種まきの時間だよ」とアドバイスいただきました。具体例をあげると、他自治体の共同研究員の訪問先に同行する、産学官関係のイベントやセミナーに積極的に参加する、といったことでした。

元来人見知りの私にとって「イベント後の懇親会にも参加すること」はかなりハードルが高く、最初は周りの目線にビクビクしながら参加していました。それでも積極的に名刺交換を行い、その都度共同研究員の役割や釜石市の概況等を紹介した結果、この2年間で名刺交換をした人は400人以上にもなりました。前部署では、4年間で100人弱の人としか名刺交換をすることがなかったため、いただいた名刺をデスクに保管するたびに、これまで交換した名刺がどんどん厚みを増していくことに驚きを隠せません。この2年のなかで、ある展示会への参加をとおして知り合った人のなかには、毎年岩手大学と釜石市が共催で行う「岩手大学地域連携フォーラム in 釜石」でご講演いただいた方もいらっしゃいます。企業の立場から自社での新たな産学官連携の事例紹介を行っていただき、参加者にもたいへん好評を博しました。

ですが、種まきをするだけでは植物は育たないのと同様で、単純にイベントに「参加する・刺さる」だけでは私の血肉にはなりません。はじめは知らない世界を知れる喜びに浸るばかりでしたが、次第に相手の話に相槌しか打てない自分に気づくようになりました。先生の研究内容が難しく理解できない。調べても言葉自体が難しい。名刺交換した人が働いている業界の動きがわからない。研究が社会実装した先のイメージが描けない。あげるとキリがありませんが、産業振興に携わる上で圧倒的な知識不足であることを感じていました。また、共同研究員

1年目を終えようとしたタイミングで、かなりひどい交通事故に遭ってしまい、事故後はリハビリや後遺症の影響で職場に行けなくなることが多くなりました。何もできない自分が情けなくなり「私は派遣職員として用済みかもしれない・・・」と落ち込む日々が続きました。

3. 自分には何が足りないのか

共同研究員に寄せられる相談内容の分野は多種多様です。ということは、共同研究員として関わるステークホルダーや業界も多岐にわたるということです。あまりにも産業、企業、ビジネスに関する知識が不足していたことに加え、職場に行けないなかでもできることを見つけなければと思った私は、当時巷で話題となっていた、会社四季報のデータをひたすら Excel に手入力する修行「四季報写経」に取り組みはじめました（気になった方はぜひ検索してみてください）。世の中にはどんな業界があってどんな会社があるのか。先生方の研究内容はどんな業界と親和性があるのか。なにより動かなければ、いつか「もう結構です」と肩を叩かれるかもしれない。なんとかあがき続けなければ。その一心で写経に励むようになりました。まだまだ不十分なところはありますが、少しずつ業界の特色や企業の事業展開がわかってきて、どの分野とどの分野がつながるとイノベーションが生み出せるのだろうか、などと考えられるようになりました。

加えて、このタイミングで、一方的に毛嫌いしていた生成 AI を使ってみることにしました。共同研究員として何より重要な先生方のシーズ収集ですが、AI を活用することでより効率的に情報を集められるようになりました。例えば「ChatGPT」には先生の論文や科研費テーマを要約してもらい、難しい専門用語であっても私が理解できるまで、そして自分が研究を知らない人にも説明できるレベル感まで落とし込みました。「Perplexity」や「Gemini」では、先生のこれまでの企業との連携事例や類似例がないか検索したうえで、今後予想される釜石市内の企業との連携事例のアイデアを出してもらい、自らの意見を織り交ぜて、研究室訪問の際に先生へ実現可能性の可否を伺うようになりました。これからも、この素晴らしい文明の利器を大いに活用し、先生方の研究と地域産業の連携可能性を探っていきたいと思っています。

4. 学生を通じた岩手大学と釜石市の継続した連携に向けて

つぎに、今後のさらなる岩手大学と釜石市との継続した連携に向けてのカギを2点述べます。

1つ目は、釜石キャンパスの認知度向上にむけた取組みの推進です。釜石キャンパスは平成30（2018）年に開設された、農学部水産システム学コース3年後期課程からの一部の学生の研究拠点となる施設です。釜石キャンパスに通う学生たちの地域連携活動等のサポートも、釜石市共同研究員ならではのミッションと認識しています。これまで学生が企画運営するイベントにいくつか関わってきました。とりわけ印象的だったのは、NEXTSTEP 工房「同じ釜の匂いを食う 2024」の学生2名が企画した催しです。具体的には、魚食普及や県産品の地産地消を推進するために、釜石湾漁協平田女性部の協力のもと、釜石湾で養殖されている「釜石はまゆりサクラマス」を使用したメニューを学生たちが開発し、上田キャンパスの3つの学生食堂で提供したものです。私もイベント開催前から随時サポートを行っていましたが、事前周知や当日のイベントに参画するなかで、上田キャンパスに通う学生たちの釜石キャンパスに対する認知度の低さを肌で感じました。釜石にキャンパスがあることや、釜石キャンパスの学生たちが地域連携としてさまざまな活動を行っていることを知らない学生が多いのです。これまでも歴代共同研究員は、釜石キャンパスの活動周知に努めてきました。例えば「岩手大学地域連携フォーラム in 釜石」で水産システム学コースの学生の研究発表の場を設けたり、釜石キャン



学食提供の周知ポスターの写真。デザインは学内カンパニー+DESIGNの学生さんが作成したものです。学生同士が連携して取組んだ本イベントは、当初の提供予定期間よりも1日前倒して全品完売という、嬉しい結果になりました。

ンパスの取組みを市の広報誌に掲載することで、地域の方が学生の活動を知れる機会をつくっていました。

このイベントをとおり、対学生への継続した釜石キャンパスの活動周知が必要であることを実感した私は、昨年10月に中央食堂2階に開設された学内コワーキングスペース「TOVLAB（トヴラボ）」内に、釜石キャンパスの概要や学生の地域連携活動を掲載したパネルを設置しました。学生をはじめ県内外の企業が集まる空間を活用することで、より多くの人に釜石キャンパスでの研究活動や学生の生活を知ってもらうことができると考えています。また、TOVLABを活用して上田キャンパスの学生と釜石キャンパスの学生が交流したり、上田キャンパスの学生が釜石キャンパスに継続して関われる仕組みづくりができないかと考える日々です。

2つ目は、岩手大学生の釜石市との交流の場を創出することです。岩手大学に入学する学生のうち、県内高校を卒業した学生はおよそ3割とされています。逆を言えば、残りの7割の学生は県外の高校を卒業した学生であり、釜石を知らない学生の方が多数を占めるということです。岩手大学では、令和6年4月に全学部の学生を対象とした共修プログラム「イーハトーヴ協創コース」が開講され、県内外で活躍する多種多様な方々とともに学び合う授業展開がなされています。釜石市でも、関係人口創出に向けたさまざまな施策を行っているため、それぞれの枠組みの活用、または融合させることによる新たなつながりを生み出せないか、考えを巡らせています。



小川学長をはじめ学内関係者の皆さんと一緒に、釜石市にある釜石鶴住居復興スタジアムを見学したときの写真。前日に開催された「岩手大学地域連携フォーラム in 釜石」のエクスカージョンの一環として、市職員のアテンドによりスタジアムを見学しました。（撮影：令和7年2月21日）

5. これまでの感謝と今後の展望

今年で共同研究員生活3年目に突入しました。歴代共同研究員の派遣年数を鑑みると、共同研究員としての任期はあと1年となります。これまで岩手大学、釜石市役所の皆さんをはじめ、多くの方からの励ましのおかげさまで3年目を迎えることができました。この場を借りて心より感謝申し上げます。

産学官連携は、関係者がただただ手を取り合うだけではなく、それぞれの立場にしながらも、どれだけ同じ方向を向いて進んでいけるかにかかっているのだと、この2年間をとおして学びました。地域連携の事例を増やしていくためにも、コーディネーター役が各所のニーズ・シーズを丁寧にききとり、それぞれにあわせたかたちでつなげていくことが肝要と考えています。コーディネーターとしての通訳・翻訳機能を果たせる人材になれるよう、これからも急がず焦らず、一步一步着実に歩みを進めてまいります。まだまだ未熟な点もございますが、今後とも変わらぬご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

JST「共創の場形成支援プログラム」(地域共創分野・育成型)
農村と都市との豊かな結びつきを育む『いわて畜産テリトリー』創造拠点
形成プロジェクト

拠点運営機構設置責任者 岩手大学理事・副学長 水野雅裕

科学技術振興機構(JST)の令和6年度「共創の場形成支援プログラム(COI-NEXT)」(地域共創分野・育成型)に岩手大学農学部の澤井健教授をプロジェクトリーダー(以下 PL)として申請した提案が、書類審査、ヒアリング審査を経て昨年10月1日に採択されました。共創の場形成支援プログラムとは、大学等を中心として、企業や地方自治体・市民等の多様なステークホルダーを巻き込んだ産学官共創により、国連の持続可能な開発目標(SDGs)に基づく未来のありたい社会像を拠点ビジョンとして掲げ、その実現のため、「バックキャストによるイノベーションに資する研究開発」とそれを支える「自立的・持続的な拠点の形成が可能な産学官共創システムの構築」をパッケージで推進するプログラムです。今回採択となった地域共創分野・育成型の支援期間は2年(実質1年半)で、委託研究費は2.5千万円/年度です。2年度目の後半(今年の秋)に本格型への昇格審査があり、昇格できると最長10年、最大2億円/年度の委託研究費を得ることができます。令和6年度の地域共創分野・育成型の公募には66件の申請があり、採択されたのは6件だけでした。この中から本格型に昇格できるのは1~2件であろうと予想しており、厳しい競争を勝ち抜くために澤井教授を中心に拠点ビジョンの深掘りや計画のブラッシュアップに総力を挙げて取り組んでいるところです。

「共創の場形成支援プログラム」の公募は私が理事(研究・地域連携担当)・副学長に就任した令和2年度から毎年行われており、初回から毎年応募してきたのですが、なかなか採択に至りませんでした。令和5年度にはじめて畜産業の振興をテーマに申請したところヒアリング審査まで進むことができ、手ごたえを感じました。このときヒアリング審査を通過できなかったのはバックキャストで研究開発課題を設定しなければならないところ、岩手大学がいま持っている研究シーズをベースに研究開発課題を設定したこと、科学技術を社会実装するためには人文・社会科学を含めた総合知が必要とされているのですが、人文・社会科学系の研究者の巻き込みが足りなかったことなどが主な理由でした。実は令和5年度は申請テーマをなかなか決められず、申請を断念しようと思っていました。それを小川学長に伝えたところ、「申請しないという選択肢はない」と告げられ、農学部出身の喜多理事・副学長の協力を得ながら突貫工事で申請書を作成しましたので、いろいろと不備があったのは仕方ありませんでした。不備はありましたが令和5年度に申請したからこそ方向性が明確となり、令和6年度の採択につながったと思っています。令和5年度に申請を断念せずに本当によかったです。

令和6年度の申請にあたっては、岩手県庁OBで、農林水産業の分野で重責を務められた方を客員教授として迎え、岩手県農林水産部との連携強化、畜産業が盛んな県北の自治

体との連携強化、県内畜産関連機関との連携強化を図りました。そして多くの方々と意見交換を重ね、畜産業を取り巻く課題をしっかりと認識しました。令和 5 年度の申請での反省を踏まえ、総合知を取り入れる必要があると考えていたところ、澤井 PL が“テリトリー”という言葉の拠点名称に入れることを提案してきました。お昼におにぎり片手に読んでいた「畜産技術」という雑誌に「イタリアのテリトリーと畜産物の地産地消」という海外情報記事が載っていて、それに感銘を受けたと言うのです。会議の場にいた誰もが“テリトリー”という言葉を知りません。英語の“テリトリー”は単に“土地、地域”を表す言葉、フランス語の“テロワール”は“風土の、土地の個性”といった、農産物が生育する自然環境を包括的に表す言葉ですが、それらに語感がよく似ている“テリトリー”とはいったい何なのか？調べてみると、テリトリーとは、行政区を越えて、共通の社会経済的、文化的なアイデンティティを持ち、生産・加工・販売・消費が行われる都市・集落・農村の総体を表す言葉と書かれています。この説明だけでテリトリーの概念を理解するのは難しいですが、イタリアではテリトリーの概念を農業政策に取り入れたことで衰退しかけていた農村が活気を取り戻したそうです。我々のプロジェクトは畜産業を核にして農村を活性化することを目指すので、非常に良い言葉を見つけてきてくれたと思いました。最初は自分達だけでテリトリーを勉強し、その概念をプロジェクトに組み込もうとしたのですが、記事の執筆者であり、日本におけるテリトリー研究の第一人者である法政大学の木村純子教授にプロジェクトに加わっていただいた方がよいという意見が出て、澤井 PL が全く面識のない木村先生に参画の要請をしました。木村先生は「イタリアのテリトリー戦略―甦る都市と農村の交流―」（白桃書房）、「持続可能な酪農―SDGs への貢献―」（中央法規）、「南イタリアの食とテリトリー―農業が社会を変える―」（白桃書房）といった本を編著されていて、農林水産省地理的表示（GI）に関わる検討会議で学識経験者としても活躍されている先生です。澤井 PL の熱意が伝わったのか、木村先生からご快諾をいただき、副 PL として本プロジェクトに加わっていただくことになりました。その後、木村副 PL には岩手に何度も足を運んでいただいて、テリトリーに関するご指導だけでなく、効果的な広報のやり方に関しても親身になってご指導いただいております。6 月には、法政大学と岩手大学の学生によるワークショップなども行う予定です。

前置きがだいぶ長くなってしまいましたが、我々のプロジェクトの概要を説明したいと思います。岩手県北部の 6 市町村は、畜産をなりわいとして、地域の風土・歴史・文化・くらしが密接に関係し合いながら発展してきた地域です。しかしながら、当地域は、条件不利地を多く抱え、人口減少が急速に進む中で、気候変動や資材価格高騰などの影響により、畜産業の継続のみならず、農村コミュニティの存続そのものが危ぶまれる状況にあります。このため、本プロジェクトでは、「農村のなりわいを守り、都市との豊かな結びつきを育む『いわて畜産テリトリー』の実現」をビジョンに掲げ、畜産業を中心に、生産効率のみを重視するのではなく、畜産がもたらす産品や教育効果、景観等の活用・保全を通して農村と都市の人々が共に真の豊かさを享受できる社会の創造に向けて取り組みます。

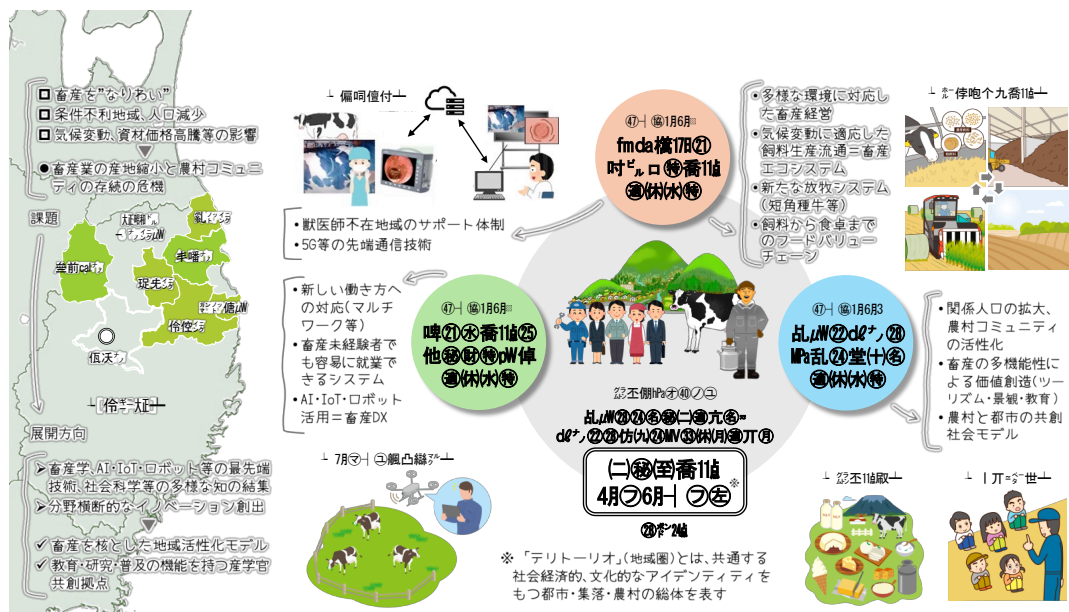


図1 「いわて畜産テリトリー」創造拠点形成プロジェクトの概要

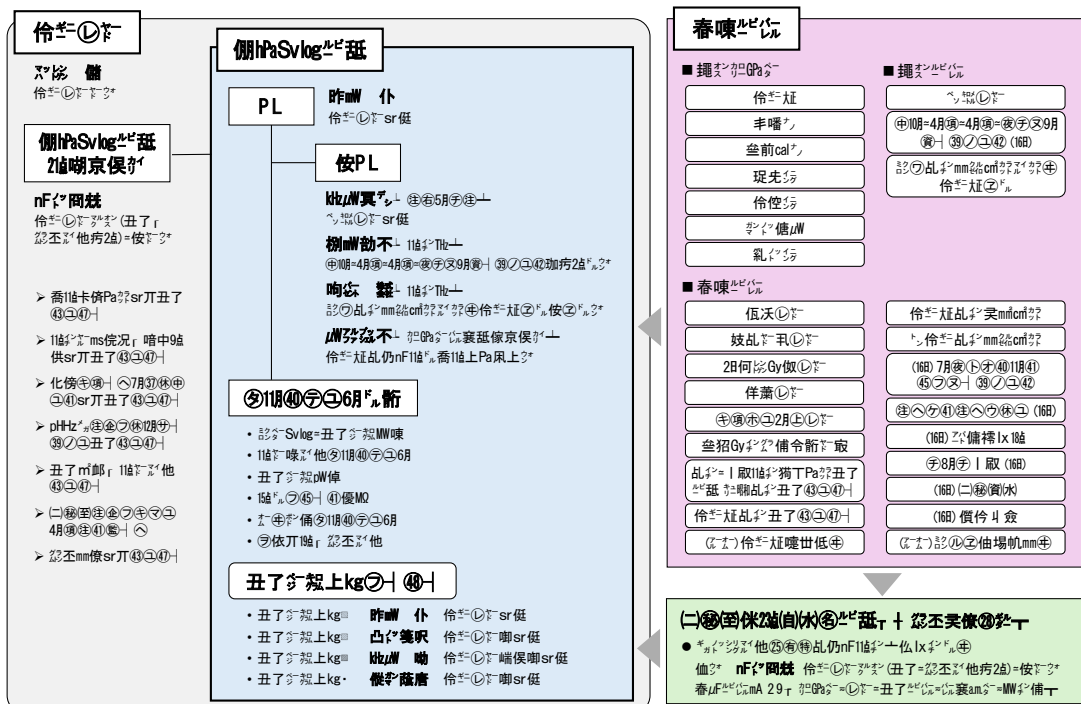


図2 プロジェクトの運営体制

ビジョン実現に向けて、図1に示すように「①持続可能で魅力ある畜産をつくる」「②誰でも畜産に携われる基盤をつくる」「③農村と都市の多様なつながりをつくる」をターゲットとし、本学等の豊富な研究蓄積や多様なネットワーク等を生かしながら、畜産学を基盤と

して、AI や IoT、5G およびロボット等の最新技術に加え、社会科学などの多様な知を結集し、分野横断的なイノベーション創出を推進します。また、畜産を核とした地域活性化モデルの構築・展開に向けて、教育・研究・普及の機能を持つ産学官共創拠点の形成を目指します。現在のプロジェクトの運営体制を図 2 に示します。参画機関は今後増やしていく計画です。

我々が参考にする“イタリアの豊かさ”についてご理解いただくため、木村教授が以前書かれた文章を以下に引用します。“イタリアは、経済的な豊かさや失業率といった点では日本に劣りますが、おいしい食べ物や美しい景観に囲まれ、人々が日々の生活を謳歌しているという意味でとても豊かな国と言えます。この豊かさを支えているのは農業です。地域性に富んだ伝統的な食文化、畑が濾過してくれる水、人々の心を癒す景観、地域の在来種を含む生物多様性などは農業の多機能性と呼ばれます。イタリアの人たちはこうした農業の多機能性を守ろうという強い意識を持っています。イタリアの農業を表すキーワードに「テリトリー」があります。これは「共通する社会的、経済的、文化的なアイデンティティをもつ都市と農村のまとまり」を意味します。近代化や工業化による効率化を目的とせず、その地域の伝統や価値を守ろうとする意識が根づいています。もう 1 つのキーワードは地域の資源を守ろうとする「コモンズの精神」です。コミュニティの皆が地域の水や土壌などの資源を独占したり使い切ったりすることなく、活用しながら、保存していく。さらに、違う産業の人たちとも協働で活動し、農産物・食品の販売だけではなく、人々を惹きつける景観やレクリエーションで、ツーリズム（観光）を含めた地域全体の活性化にもつながっています。”

山・里・海の自然に恵まれた岩手は、米や野菜、海産物、肉・乳製品など、新鮮でおいしい食材にあふれており、食材の宝庫と言えます。その裏には、こだわりを持って食材の生産に取り組んでいる人達があります。そのような方々の力を借りながらこの「いわて畜産テリトリー」プロジェクトを成功させたいと考えています。食材の生産・販売だけではありません。イタリア北部のコモ湖周辺は酪農とともに絹織物の産地としても有名で、テキスタイルの有名ブランドメーカーがあります。これは畜産業と縫製業が盛んな岩手県北地域とよく似ています。例えば、岩手県北地域にデザイナーを招き、つくるだけではなくデザインという付加価値によって産業を活性化させることができれば若者を惹きつけることができるかもしれません。盛岡市は令和 5 年にニューヨーク・タイムズ紙で「2023 年に行くべき 52 カ所」に選ばれました。私は盛岡の魅力は岩手の地方によって支えられていると考えています。岩手を、豊かさを感じられる魅力ある地域にするために、何としても本プロジェクトを成功させたいと思っています。

我々のプロジェクトにご注目いただき、ご支援とご協力をいただければ幸いです。

I N S と 私

株式会社ニュートン 沼田 秀彦

1 はじめに

私は、1996年（平成8）に盛岡市役所から財団法人岩手県高度技術振興協会（通称テクノ財団）派遣となったことがINSとの出会いでした。当時、カワトク百貨店（盛岡市）で行った展示会が良い思い出です。2年後盛岡市役所に戻り、ITや情報公開・個人情報保護などの総務系を担当した後、商工関係の部署を退職まで経験しましたが、INSを通じた交流、特に懇親会で深めた岩手大学の先生方には、学識経験者として審議会などで大変お世話になりました。改めて感謝申し上げます。

盛岡市役所を定年退職するまでは、INSの総会・大懇親会に参加し、たまに興味のある研究会に顔を出すくらいでしたが、年2回開催するINSゴルフコンペの企画運営には力を入れました。本稿では、このゴルフコンペの歴史などを紹介するとともに、長年継続してきたコラム配信と上梓した『月曜日の朝に』に触れます。

2 INSゴルフコンペ

INS事業に位置付けられたINSゴルフコンペは、1996年（平成8）4月に南部富士カントリークラブで初めて開催されました。以来、同ゴルフ場で年2回春と秋の開催を原則に1996年から2021年まで足かけ26年かけて記念すべき50回目が2021年（令和3）10月となり、この6月には第57回目の開催となります。これまで東日本大震災の発生と新型コロナウイルス感染症拡大で2回開催できませんでしたが、来年は30周年目を迎えます。

コンペのきっかけは、企業を退職される会員が出始めたことから、その人達と大学教員との関係性を維持するためにINSの立役者である清水健司先生が企画したもので、斎藤徳美先生、馬場守先生や岩淵明先生らがゴルフ道具を買い求めてコンペが始まりました。

私は、第3回目からコンペの幹事も兼ねて参加し、以来、伝統的に盛岡市役所の職員が幹事を担っていて、今は大矢修さん（公益財団法人盛岡市都南自治振興公社・前盛岡市役所）が名幹事として采配を振っています。

第1回目の参加者の顔ぶれを見ると大学では清水健司先生らが、官では岩手県庁や盛岡市役所から、加えて製造業や金融業からの参加者もあり総勢21名でした。コンペには、20人～30人超の参加者があり、産業界が6割強で残りが大学と岩手県庁・盛岡市役所が半々くらいの割合になり



ます。腕前は、シングルクラスから超初心者までバラエティーに富んでいて、今では時間に余裕？ができた岩渕明 I N S 会長（前岩手大学学長）が毎回参加されますし、小川智岩手大学学長も日程が合えば参加してください。

悩みの種は、大学の現役先生の参加が少ないことと、時の流れとともに参加者の年齢層が高



くなってきたことであり、次代を担う幹事候補を探しています。ゴルフは、4人一組で緑豊かな18ホールをプレーし打数の少なさを競うスポーツですが、昼食をはさんで6時間ほど会話したり、相手のプレーを見たりして過ごすため、同伴プレーヤーの人となりが分かり、話によっては産学連携のきっかけともなります。I N S お決まりの「いつも飲んで騒ぐ会」のような飲み会とは違いますが、互いの理解が深まる絶好の機会となります。

2025年のコンペ開催は、6月7日（土）と10月4日（土）を予定しています。参加ご希望の方は、I N S のホームページ（<https://www.iwate-network-system.org/>）に概要が掲載されますので、チェック願います。

3 コラム配信

私は、2017年4月から毎週月曜日にコラムを配信しはじめました。そのタイトルは、その時々小生の立ち位置で変えています。盛岡市の商工観光部長として「部長の部屋から」を2年間、公益財団法人盛岡地域地場産業振興センター（盛岡手づくり村）の専務理事として「専務の独白」を約3か月、盛岡市企業支援マネージャー兼盛岡市産学官連携研究センターインキュベーションマネージャーとして「沼田 I M の興味津々」を約5年9か月、通算8年間一週も休まず通算417回のコラムを配信しました。そして、この4月からは「沼ジィの興味津々」として祝日等を除く月曜日にコラムをお届けしています。

はじめの2年ほどは、盛岡市職員や盛岡手づくり村の職員へコラムを配信していましたが、「沼田 I M の興味津々」以降は、これまで名刺交換した企業人が多くを占め、一部の岩手大学の先生や盛岡市の関係者も含まれ、今では500名を超えています。そして、このコラムの配信も産学官連携の一つの形態であると思っていますし、コラムを社内で回覧していると朝礼の話題に使ったりしていると何うと嬉しさがこみ上げてきます。

コラムの内容は、仕事上での気づき、業務する上での考え方やポイントに加えて、目を通した本・新聞・雑誌やお客様との会話で興味を持ったことを書いています。そして、その内容には組織のマネジメントや人材育成、流行りのキーワードなどが混在していますが、ビジネスの進展や組織運営などに多少なりとも参考なればと願っています。

4 『月曜日の朝に』上梓

マスコミ関係者と音楽関係者と飲み会をしたときに、書籍化という妄想が生まれ、さらにはコラムを読んでいただいている社長さんから勧めもあり、2024年に入ってから準備を始め

ました。

コラムは、2017年から7年間で364本あり、全てを本にすることはボリュームとして無理がありました。そこで毎年度の各月最低1本以上で年間13～18本を選び、全部で108本を掲載することにしました。表紙は、私が撮影した岩手大学農学部にある「北水の池」の蓮の写真を用い、帯には小川智岩手大学学長のコメントをいただいております、小生にとって生涯の記念となりました。

『月曜日の朝に』の章構成の一部

1章 2017年度 1. 5ゲン主義 2. 嫌われる勇氣 3. 原因 4. 愉快に働く 5. TechShop 6. 塵も積もれば 7. 街歩き 8. 仕事の根底 9. 太陽の光 10. 仕事 11. カラースティ 12. 笑顔 13. 新ブランド 14. ネットワーク	2章 2018年度 1. 新年度の始まり 2. 準備 3. 後始末 4. 心 5. 鑑の法則 6. 気が利く 7. 大局観 8. サラメシ 9. レッテル 10. ドラッカー 11. つなぐ 12. ABC理論 13. 現場力	3章 2019年度 1. 軽くなった左胸 2. 三つの念 3. 価値 4. 見える気配り 5. 他人事 6. オーバーツーリズム 7. ボトルネック 8. 記憶 9. 南部鉄器 10. 夢 11. 共感 12. 山水郷 13. 挨拶	4章 2020年度 1. ミレニアル世代 2. Beyond MaaS 3. 座組 4. 強い現場力 5. 出羽守 6. 思うの表現考 7. ダムとムダ 8. ジャムの法則 9. 四性五味 10. 予防 11. 部長 12. 掃除機 13. チーム 14. 心星 15. 危機突破力 16. ミスマッチ
---	--	---	---

自費出版ではありますが、2024年末に出版し、2025年正月からAmazonで販売しています。また、同年2月下旬からは、盛岡市内有名書店でも取り扱っていただいております。販売後、懇意にしている企業トップの方々に買い求めていただき、社員に読んでもらっているとのお話を伺うと、出版の喜びも一塩です。

5 おわりに

30年近くにわたり多少なりともINSという産学官連携にかかわらせていただきました。今は、精密プラスチック製品の射出成形加工、金型設計・加工を展開している株式会社ニュートンに籍を置いており、盛岡市役所・岩手大学・モノづくり企業の産学官のそれぞれに所属したことになります。

また、関西ネットワークシステム(KNS)にも参画し、関西の方々とも交流させていただいております。そこで知り合った林弘樹さん(映画監督・ものがたり法人Fire Works)には、拙著の出版祝いも企画していただき、産学官交流での人との出会い・縁を感じざるを得ません。

振り返ると、柳生家の家訓である「小才は縁に出会って、縁に気付かず 中才は縁に出会って、縁を活かさず 大才は袖擦れ合う縁も、これを活かす」は、産学官連携における重要な視座であると思えてなりません。INSの退潮が指摘される中、SNS全盛の時代においては、「縁」を活かせる人材がキーとなるはずで。なお、INSゴルフコンペや『月曜日の朝に』に関してのお問い合わせは、アドレス(hide.numata.y@gmail.com)までお願いします。

「日本は 120 人の縄文人からはじまった ―工学研究者の考える古代日本史―」

岩渕 明

この本の位置づけはスケールシフト第 3 弾である。岩手大学長の時代、サイエンティフィックな頭を使っていないことにある種欲求不満を感じていたのも、40 年に及ぶ研究成果を研究者視点とは別の角度から見直してみようと「スケールシフト学考」(2018 年)としてまとめた。当然対象はトライボロジー的課題をベースに進めたが、それが広く学問に通じると考え、自然科学や社会科学的話題も対象とした。

人間とは不思議なもので、一冊書き終えたとまた書きたくなる。当然スケールシフトの考え方が残した対象が浮かんでくる。それは地方と中央という立ち位置の違いである(「スケールシフトで考える地方と中央」(2020 年))。岩手県は地方であるが、県内で見れば盛岡は都会である。十把一絡げで捉える地方に疑問を感じていたのも、そこで提案したのが「田舎度」というパラメータである。

田舎度 = 人口 / 東京からの時間距離

地方から見た中央、中央から見た地方、中央から見た中央、地方から見た地方など立ち位置をかえてみた。地域の課題は多様であり、基準としての田舎度である。

さて 2020 年 3 月に学長を退任し、岩手県工業技術センターに勤め始めた。それまでと違い比較的時間に余裕ができ、また書きたくなった。そのテーマは日本古代史である。日本史の教科書をみれば、疑問な点が様々あった。何故古代史かと言えば、学長時代に平泉文化研究センターのフォーラムに参加し、平泉あるいは奥州藤原氏の栄枯盛衰、その前の阿弭流為の存在、・・・縄文人はいつどこから何人で日本にきたの・・・と知的好奇心の連鎖である。高橋克彦の「ほむら立つ」を手始めに井沢元彦の「逆襲の日本史」、はたまた鬼頭宏の「人口から読む日本の歴史」、篠田謙一の「日本人になった先祖たち」と読み始めた。

小学校から日本の歴史を学んできて、いくつかの疑問、なぜかという知的好奇心がわいてくる。古代史だから史料(資料)がないといっても、5W1H の説明がない。例えば

弥生時代の始まりは弥生土器、稲作の開始、大陸からの渡来人等の項目があげられているが、あたかも自然発生的に生まれたような記述である。そこで工学的あるいはスケールシフト的考察を歴史に適用できるかを考えた。物理量として時間、人口などが考えられる。歴史の時間スケールは対数的であり、遠近法的に遠い過去は短いスパンとなる。考察の手始めは人口の推移である。PC で検索し、ウィキペディアに鬼頭らの古代からの人口推移を見つけた。これなら使えと、



8100 年前と 5200 年前の人口から人口増加率を求めて過去の人口を推定する。それには

$$N=N_0X^n$$

の式を用いる。ここで N は基準年から n 年後の人口、 N_0 は基準年の人口、 X は人口増加率である。具体的に計算すると 8100 年前から 5200 年前の期間の人口増加率は 1.00057 人/年であり、2 万年前の人口は 23 人と求まる。では縄文時代はいつからか。1.5 万年前では計算できない。歴史学者により 1.7 万年~1.3 万年前と人それぞれであり、幅がある。そこでもっとも古い縄文期の開始の 17000 年前を、エイヤーと、大陸から渡来してきたと仮定する。するとその時の人口は 126 人となる。これが表題である。

その後人口は単調増加ではなく 4300 年間に 26 万人の最大値をとった後 2900 年前には 7.5 万人まで減少した。今度は 2900 年前の人口（縄文人）を基準にして計算すると奈良時代の人口には到底到達しない。

日本史の教科書には大陸から多くの渡来人が来たとは書いているが、いつごろ、何人ぐらいでの情報は無い。ならばそれを推測しようとなる。人口は自然増と社会増があり、渡来人は社会増であるが、日本に移住した後は自然増になる。当然縄文人は自然増で計算する。渡来人の最初の時期、そして渡来者の数、人口増加率を仮定しながら、奈良時代の人口からの外挿値に合わせるように求める。詳細は省くが、縄文人（先住民）の数と人口増加率、渡来人の数とその人口増加率を仮定しながら計算すると、700 年に渡って最大 100 万人を超える人が渡来しなければ、奈良時代の人口を満たさなくなる。多くの渡来人が来たといっても、想定外の大きさである。

縄文期には狩猟、採集と若干の農耕で人口と食糧が平衡状態にあったとしても、年間数千人もの渡来者への食糧調達は難しい。そこで、彼ら自身のために稲作が必要であったと考える。イノベティブな稲作が自然発生的に生まれるわけではない。それを切に求める人たちがいたということである。計算すれば、渡来人の数（自然増を加味した倭人グループ）は当時の人口 450 万人のうち 400 万人以上となり、縄文人（先住民）は 30 万人あまりである。阿弭流為の降伏も奥州藤原の滅亡も当然と言えば当然であろう。稲作の発展とともに収穫量が余剰になった分は朝鮮半島からの鉄の輸入に充てることでヤマト政府はますます勢力を拡大した。極論すれば渡来人（古代朝鮮人）による縄文人の住む日本への侵略戦争があったと言えないだろうか。

歴史を工学的に見るとは、定量性を意識する必要がある。その意味で、歴史をみる立ち位置を変えることがスケールシフトにつながる。古代日本史は文献のない世界であり、「想像と創造」が可能な分野ともいえる。古文書を読めない素人でも PC の検索エンジンを使えば情報は得られる。真偽に問題あると言われているにしても、著者の責任で妥当な説を選ぶことで歴史のスムーズな流れを推察したわけである。

興味ある方は是非ご笑覧いただきたい。自費出版ですので数に限りがあり、関心のある方は、akiraiwab918@gmail.com までご連絡ください。

齋藤徳美先生と(株)アイカムス・ラボが「岩手日報文化賞」受賞

齋藤徳美先生と(株)アイカムス・ラボが第 77 回 岩手日報文化賞（2024 年 11 月 3 日）を受賞されました。齋藤先生は初期の INS の運営委員長を務められ、(株)アイカムス・ラボの片野圭二会長は現副会長と 2 人とも INS の重鎮です。

齋藤先生は INS 岩手山火山防災検討会を含む長年の防災や復興への取り組みが評価されました。特に 1997 年の岩手山の噴火に対す盛岡市等の「防災マップ」を産学官民との協働で早く作製し、さらに 2011 年の東日本大震災においては被災地に入り、県の対策委員会やその後の復興委員会において学識経験者の立場から中心的役割を果たしてきました。災害復興とその後の防災に関する活動は先生のライフワークで、現在も県内の自治体に対し防災・減災の指導を行っております。

(株)アイカムス・ラボは、岩手大学発ベンチャー（大学認定 2 号）で平成 15 年に設立されました。発端は片野会長が岩手大学地域共同研究センターで実施した経産省の地域コンソーシアム研究開発事業であり、多くの INS メンバーの応援でベンチャーを立ち上げました。当初はマイクロデバイス開発でしたが、その後はマイクロアクチュエータをコア技術として医療、ライフサイエンス分野に事業展開をしてきました。また、アイカムス・ラボは、INS の兄弟組織ともいえる「東北ライフサイエンスインスツルメントクラスター」（TOLIC）の中心的企業であり、岩手県のベンチャー企業の雄として活動しており、今後の発展が期待されます。

なお、岩手日報文化賞は岩手日報社が岩手県の社会、学術文化、産業経済に顕著な功績をあげた個人または団体を 1948 年から表彰してきたものです。

参考：岩手日報ホームページ 岩手日報文化賞・体育賞のページ

<https://company.iwate-np.co.jp/cultural-sports>

岩手ネットワークシステム会則

第1 名称及び事務局

本会は、岩手ネットワークシステム（以下「本会」という。）と称し、事務所を岩手大学（盛岡市上田四丁目3番5号）内に置く。なお事務所を本会の住所地とする。

2 本会の設立年月日を平成4年3月14日とする。

第2 目的

岩手県内における科学技術および研究開発に関する人および情報の交流・活用を活発化し、共同研究を推進し、もって科学技術および産業の振興に資することを目的とする。

第3 事業

前条の目的を達成するため次の事業を行う。

- (1) 科学技術および研究開発に関する知識の習得および普及
- (2) 共同研究グループの育成
- (3) 科学技術および研究開発に関係している人の相互の親睦と交流
- (4) その他必要な事業

第4 会員および事業等への参加

本会の趣旨に賛同する者は誰でも入会の資格を有し、本会が行う事業等に参加することができる。

- 2 会員は、法人会員および個人会員とする。
- 3 退会を希望する者は、事務局に届け出るものとする。

第5 役員

本会に会長1名、副会長数名を置く。

- 2 会長および副会長は会員の中から総会で選出する。
- 3 会長はこの会を代表する。
- 4 副会長は、会長が欠けたとき又は事故のあった時にその職務を代理する。
- 5 役員の任期を2年とする。ただし、再任を妨げない。

第6 総会

総会は会長が召集する。

- 2 総会の議長は会長が務める。
- 3 総会の議決事項は次のとおりとする。
 - (1) 事業報告および決算
 - (2) 事業計画および予算
 - (3) 会則の制定、改正
 - (4) 役員の選出、改選
 - (5) その他必要と認められる事項

第7 運営企画委員会

本会の運営と企画について協議するため、運営企画委員会を置く。

- 2 運営企画委員は、会員の中から会長が指名する。
- 3 運営企画委員長は、運営企画委員の中から互選する。
- 4 運営企画委員および運営企画委員長の任期を2年とする。ただし、再任を妨げない。

第8 研究会

会員は、共同研究等を行うため、研究会を設置することができる。

- 2 研究会を設置または廃止した時は、速やかに会長に届けるものとする。
- 3 研究会の運営については、自主性を尊重するものとする。

第9 会費

会費は、法人会員の場合、1口1万円、1法人年間1口以上とし、個人会員の場合は年間2千円とする。

第10 事務局

事務局員は、会員の中から会長が指名する。

- 2 事務局長は、事務局員の中から互選する。
- 3 事務局員および事務局長の任期を2年とする。ただし、再任を妨げない。

(付則)

この会則は、平成4年3月14日から施行する。

(付則)

この会則は、平成12年5月20日から施行する。

(付則)

この会則は、平成30年5月9日から施行する。

(付則)

この会則は、令和4年5月28日から施行する。

(付則)

この会則は、令和5年5月25日から施行する。

役員 (2025.5.25～2 年間)

会長

岩渕 明 前岩手大学長

副会長

水戸谷剛 東日本機電開発(株)
片野圭二 (株)アイカムス・ラボ
長田 洋 岩手大学理工学部

運営企画委員長

内舘道正 岩手大学理工学部

運営企画委員

内舘道正 岩手大学理工学部
今井 潤 岩手大学研究支援・産学連携センター
山口 明 岩手大学理工学部
土岐規仁 岩手大学理工学部
西村文仁 岩手大学理工学部
藤代博之 岩手大学名誉教授
八代 仁 岩手大学名誉教授
水野雅裕 岩手大学理事
田村直司
遠藤憲子 仙台青葉学院短期大学ビジネスキャリア学科
賀東駿介 岩手県科学・情報政策室
和川 泰 岩手県ものづくり自動車産業振興室
高橋浩進 岩手大学研究支援・産学連携センター
伊藤 良仁 (地独)岩手県工業技術センター
富手壮一
田澤 潤 (公財)いわて産業振興センター
三上 敏広 (公財)いわて産業振興センター

会計監査

高橋浩進 岩手大学研究支援・産学連携センター
富手壮一

事務局

岩手大学研究支援・産学連携センター 内

TEL:019-621-6491

FAX:019-621-6493

E-mail:ins@iwate-u.ac.jp

事務局長

今井 潤 岩手大学研究支援・産学連携センター

2024 年度 INS 事業報告

1. 研究会活動：23 研究会

新設 シニアエキスパート研究会、エネルギー・エージェンシーいわて研究会

2. 総会・講演会・交流会（5 月 25 日）

3. 冬の集い（12 月 21 日） 日本酒アカデミーin 紫波

4. 若手企画委員会企画イベント（協創力M I Xプロジェクト）

別紙参照

5. 産学官民コミュニティ 他組織との交流

KNS 定例会 in MOBIO/INS in 関西（9 月 7 日）

6. ホームページの更新

<https://www.iwate-network-system.org/> への移行

7. 運営企画委員会：8 回

4 月 11 日，5 月 9 日，7 月 24 日，9 月 20 日，10 月 23 日，11 月 15 日，2 月 20 日，3 月 27 日

8. その他研究会活動等

4 月 22 日	INS エネルギー変換技術研究会 第 8 回岩手大学電気化学セミナー
5 月 16 日	INS ポリマー研究会 次世代半導体パッケージに関するセミナー
5 月 25 日	INS いわてコーディネート研究会 第 5 回総会及び第 20 回研究会
5 月 25 日	INS 総会・講演会・懇親会
7 月 8 日	INS 男女共同参画推進研究会
7 月 13 日	第 34 回 INS 環境リサイクル研究会講演会 災害廃棄物など
8 月 28 日	INS ポリマー研究会 半導体基板に関するセミナー (日本台湾半導体交流セミナー 第 2 回)
9 月 7 日	第 20 回 INS in 関西 @ものづくりビジネスセンター大阪 (MOBIO)
9 月 14 日	INS 海洋と社会研究会 いわてマリンサイエンスシンポジウム (震災後の三陸の海の現在 (いま) を考える)
9 月 30 日	INS 海洋と社会研究会 水産・海洋研究フォーラム in 陸前高田
10 月 18 日	INS ポリマー研究会 半導体材料に関するセミナー

	(日本台湾半導体交流セミナー 第3回)
11月30日	INS 地元食研究会 津志田芋の今後について
12月13日	INS ポリマー研究会 半導体基板に関するセミナー (日本台湾半導体交流セミナー 第4回)
12月20日	INS エネルギー・エージェンシーいわて(EAi) 設立記念セミナー
12月21日	INS 冬の集い ―日本酒アカデミーin 紫波―
	第46回 INS 地盤と防災研究会・第80回 INS 岩手山火山防災検討会
1月22日	INS エネルギー変換研究会 イオン液体講演会
1月24日	令和6年度第1回 INS 宇宙航空研究会特別講演会 次世代航空機開発の最新動向
1月25日	INS 海洋と社会研究会 水産・海洋研究フォーラム in 釜石
2月3日	INS 起業家研究会 トークセッションイベント「複業起業 IN 盛岡」
2月7日	INS 地元食研究会 道具から探る岩手の食
2月10日	INS SDGs 研究会 in 北上
2月15日	INS 環境リサイクル研究会 勉強会 環境技術と廃棄物
3月25日	INS 起業化研究会 起業・企業支援の実践 について

2024年度 INS総会・講演会・交流会

Iwate Network System

日 時／2024年5月25日(土) 12:30～20:30
会 場／岩手大学理工学部 みらいAIOホール(テクノホール)
主 催／岩手ネットワークシステム(INS)
岩手大学研究支援・産学連携センター

●総 会(12:30～12:50)

(1) 会長挨拶

(2) 議事

① 2023年度事業報告及び決算について ② 2024年度事業計画について

(3) その他

●講演会(13:00～17:30)

第1部

(1) 「住友生命におけるDE&I推進の取組み」 住友生命 執行役員 千葉 由紀子 氏

(2) 「チームの幸福度を向上させる取組み」 (株)ポーラ サステナビリティ推進室室長 佐藤 幸子 氏

(3) 「技術系女性のキャリア開発：事例とキーポイント」 芝浦工業大学 客員教授 國井 秀子 氏

(4) 「日本の大学におけるダイバーシティ推進・女性リーダー育成をめぐる課題
～岩手大学での取組みに携わって～」 岩手大学 副学長 海妻 径子 氏

----- (休憩) -----

第2部

(5) 「地域の中小企業が抱える課題解決と事業協創」 (株)グローバル 代表取締役 浅野 道人 氏

(6) 「MIX4net産学官金クロストーク」

ファシリテーター：(株)グローバル 代表取締役 浅野 道人 氏

サポート：(株)TOLIMS 代表取締役 片野 友貴 氏 (TOLIC幹事/岩手大学 地域協創教育コーディネーター)

産：Next IWATE 代表 / (株)東北地域商社 取締役COO 上野 裕太郎 氏 (TOLIC幹事)

学：岩手大学大学院 総合科学研究科 松坂 ひまり 氏 (TOLIC幹事)

官：盛岡市役所商工労働部 ものづくり推進課 藤井 克磨 氏 (MIX4net発起メンバー)

金：いわぎん事業創造キャピタル(株) サブマネージャー 小笠原 眞太郎 氏 (MIX4net発起メンバー)

●交流会(18:30～20:30) 参加費6,000円

「すゞ禅」(盛岡市中央通1-7-16 tel:019-651-1631) ※講演会会場から交流会会場まで無料バスを準備します。

【参加申込方法】(どなたでも参加できます)

右のQRコードからエントリーいただくか、①E-mailアドレス、②氏名、③所属、④総会・講演会・交流会への参加有無を明記のうえINS事務局(ins@iwate-u.ac.jp)にお申し込みください。



【申込締切】5月20日(月)

▶お問い合わせ先 E-mailアドレス：ins@iwate-u.ac.jp

INS 冬の集いー日本酒アカデミーin 紫波ー

日時：2024 年 12 月 21 日(土) 13：05～18：50

参加費：5,000 円

日程：13:05 岩手大学 理工学部（大学出発）

13:20 盛岡駅 西口 バスプール（盛岡駅出発）

14:00～15:30 「はじまりの学校」見学会

■お買い物時間あり

15:50～16:50 「日詰平井邸」クラフトサケ見学会～学生団体「i-Sake」様より話題提供～

■お買い物時間あり

17:00～18:50 懇親会 ご馳走 DE がんす 紫波オガール店

※貸切バスはここまで

現地解散

電車利用の例：徒歩 5 分→紫波中央駅発（19:12）→盛岡駅着（19:33）

【参加申込方法】（どなたでも参加できます）

右の QR コードからエントリーいただくか、①氏名②所属③電話番号を明記のうえ

INS 事務局（ins@iwate-u.ac.jp）にお申し込みください。

申込締切：12 月 13 日(金)

お問い合わせ先：ins@iwate-u.ac.jp



INS 冬の集い 日本酒アカデミー in 紫波 活動報告

1. 開催目的

従来は冬季講演会を開催してきたところ、若者を含めて参加者が減少していることから、心機一転、地域活動見学会という新しい取組みを実施

2. 概要

「伝統的酒造り」がユネスコの無形文化遺産に登録される見通しなど、日本のお酒づくりが世界的に注目されるなか、紫波地域の特色あるお酒による地域振興の取り組みを見学

3. 参加者

15 名(学生も含む)

4. 開催スケジュール

2024 年 12 月 21 日(土) 13:05~18:50

13:05 岩手大学 理工学部発 盛岡駅 西口バスプール経由 紫波へマイクロバス移動

14:00~15:30 「はじまりの学校」見学会



紫波町は南部杜氏発祥の地として知られる酒のまち。廃校になった水分小学校を「酒の学校」に改修工事中。そんな酒のまちで、町全体をひとつの醸造場と捉えて、新たな酒文化を醸していくプロジェクトの拠点が「はじまりの学校」。残念ながら改修工事中のためほとんど校舎内は見学不可であった。



水分小学校出身で紫波町役場職員の須川翔太氏からプロジェクトの説明。株式会社酒と学校が、2023 年に立ち上げた新プロジェクト「はじまりの学校」から、ブランド初となるお酒「はじまりのお酒」「はじまりのハードサイダー」を校内で販売中。

15:50～16:50 「日詰平井邸」クラフトサケ見学会
～学生団体「i-Sake」様より話題提供～



平六醸造代表の平井佑樹氏から案内。平井邸は 1921 年完成。日詰商店街の南端に位置する近代和風建築で当時の首相である原敬も訪れ、2016 年国指定重要文化財に指定。主屋よりもさらに古く 1909 年頃に建てられた造り蔵も残る。



かつての「菊の司酒造」の蔵でクラフトサケ醸造所を整備。全国各地から応援を受け 2024 年 1 月より醸造を開始。原料米は岩手県産米を使用し、副原料には紫波町産もち米の発芽玄米を使用。超低温発酵を特徴とし日本酒に近い清らかな飲み口。



日詰平井邸で学生団体「i-Sake」の活動報告。学生が自ら酒米の栽培や日本酒の醸造をプロデュースするが、現在、学生は岩手大学生のみ。



有料であるが製造中のクラフトサケの試飲も可能。現地購入も可能。

17:00～18:50 懇親会 ご馳走 DE がんす 紫波オガール店
(はじまりの学校と日詰平井邸から購入した酒を参加者で飲酒)

懇親会後は現地解散

"協創力MIXプロジェクト"

協創力育成プログラム スピンオフ X MIX プロジェクト (Morioka Iwate Xross)

【2024年度活動実績】

①INS総会

日時 2024年5月25日(土) 16:00~17:30

場所 岩手大学理工学部 みらいAIOホール(旧テクノホール)

1. <講演>地域中小企業が抱える課題解決と協創事例

(株)グローバル 代表取締役 浅野道人 氏

2. MIX4net(旧 INS 若手企画委員会) 産学官金クロストーク

ファシリテーター (株)グローバル 代表取締役 浅野道人 氏

サポートファシリテーター (株)TOLIMS 片野友貴氏(MIX発起メンバー)

産 Next IWATE 代表 / (株)東北地域商社 上野裕太郎 氏(TOLIC幹事)

学 岩手大学大学院 松坂ひまり 氏(TOLIC幹事)

官 盛岡市 藤井克磨 氏(MIX発起メンバー)

金 いわぎん事業創造キャピタル 小笠原真太郎 氏(MIX発起メンバー)

①協創力スピンオフ x MIXプロジェクト

「ひとと心を動かす 伝える 共感から協創へ」

ゲストスピーカー：株式会社岩手日報社 稲垣大助さん x 加藤菜瑠さん

日時：2024年8月20日(火) 18:15~19:45

場所：盛岡市中央通1-2-2 NTT 東日本岩手支店第二ビル 1F

イノベーションプラッツ 2.5 (AZLM CONNECTED CAFE manorda いわて 奥)

②MIXプロジェクト

「しゃぼん玉 day」

同時開催：由井野菜園 朝採り野菜販売

日時：2024年9月14日(土) 13:00~15:00

会場：なかのはし1-1ひろば(愛称:いちわん)

③コラボ企画

「新規事業ボードゲーム体験会」

事業共創カンパニー 株式会社 Relic

日時：2024年10月15日(火) 18:00~20:30

場所：コラボ MIU (盛岡市産学官連携研究センター)

主催：MIU Cafe 協力：協創力MIXプロジェクト

④協創カスピンオフ x M I Xプロジェクト

「一般社団法人つなぐ・いわてまち」のこれまで、そしてこれから」

ゲストスピーカー：一般社団法人つなぐ・いわてまち 監事 中村祐紀様

日時：2025年2月18日（火）18：15～19：45

場所：盛岡市中央通1-2-2 NTT 東日本岩手支店第二ビル 1F

イノベーションプラッツ 2.5 (AZLM CONNECTED CAFE manorda いわて 奥)

FIRSTSTEP および NEXTSTEP 工房大賞への賞金の贈呈について

INS 事務局 今井 潤

岩手大学では、地域に関心も持つ学生が自主的に様々な活動団体を立ち上げ、活動を展開しています。

令和6年度は、19の認定団体が地域と密着した活動を実施しています。その中で、初めて地域課題に取り組む団体向けの FIRSTSTEP 枠で3件、継続的な取り組みである NEXTSTEP 枠に13件の活動資金支援の申請があり、活動を審査の上、全ての団体に活動費の補助を行ったところです。

詳細は、下記 URL をご参照ください。

<https://www.iwate-u.ac.jp/campus/activity/letsbegin.html#nextstep>

2月末から行われた岩手大学地域協創ウィークでの各団体の発表を踏まえ、顧問教員及び学生団体、活動支援資金審査委員による投票の結果、

FIRST STEP プロジェクト 動物介在研究室

NEXT STEP プロジェクト 同じ釜の匂いを食う

が大賞となりました。各団体に対して、INS より、3万円の賞金の贈呈が行われました。



FIRST STEP プロジェクト 動物介在研究室



NEXT STEP プロジェクト 同じ釜の匂いを食う

2024年度収支決算書(案)

1 収入の部

(単位:円)

項目	予算額 (A)	決算額 (B)	増減 (B-A)	備考
会費	1,200,000	945,000	△ 255,000	
法人会費	600,000	530,000	△ 70,000	
個人会費	600,000	415,000	△ 185,000	
共催金等	0	0	0	
寄付金	0	0	0	
雑収入	0	39,904	39,904	利息 お釣り返却分など
前年度繰越金	1,361,608	1,361,608	0	
合計	2,561,608	2,346,512	△ 215,096	

2 支出の部

(単位:円)

	予算額	決算額	増減	備考
研究会補助	200,000	220,000	20,000	研究会活動費
講師準備金	50,000	0	△ 50,000	講演会
講師旅費	100,000	242,000	142,000	講演会
地方交流会派遣費	150,000	8,030	△ 141,970	県内、県外
諸団体会費	20,000	20,000	0	いわて産業振興センター
高校物理部会交流助成費	50,000	0	△ 50,000	実施せず
子ども科学教室補助	40,000	0	△ 40,000	子ども科学館 チャレンジサイエンス
交流会補助	20,000	86,620	66,620	講演会等
会場費	50,000	0	△ 50,000	冬季講演会
会議費	120,000	57,356	△ 62,644	運営企画会議
印刷費	300,000	334,950	34,950	INSレポート
通信費	50,000	60,680	10,680	総会案内等
交通費	30,000	130,480	100,480	貸切バス等
アルバイト料	60,000	50,000	△ 10,000	事務補佐謝礼
事務費	10,000	2,310	△ 7,690	振込手数料
若手活動支援費	300,000	50,000	△ 250,000	
広報費	300,000	144,100	△ 155,900	WEB作製
予備費	809,382	90,000	△ 719,382	NEXTSTEP賞金
合計	2,659,382	1,496,526	△ 1,162,856	

3 収支の部

収入決定額2,346,512円 - 支出決定額 1,496,526円 = 849,986 円
 残額849,986円は、2025年度に繰り越すこととする。

帳簿、証拠書類の監査の結果、適正に処理されていることを確認しました。

2025年5月 日

会計監査

高橋浩進 

富手壮一 

令和 7 年度 I N S 事業計画

1. 研究会活動：23 研究会
2. 総会 & 講演会（5 月）
3. 研究交流（講演会等）
4. 冬の集い（1 2 月）
5. 研究会活動のメーリングリスト等を活用した周知
6. 産学官民コミュニティー全国大会、他組織との交流
7. Reports of INS 発行
8. 岩手大学 NEXTSTEP 工房学生活動団体表彰
9. その他

2025年度収支予算書(案)

1 収入の部

(単位:円)

項目	予算額 (A)	2024年度 予算額 (B)	増減 (A-B)	備考
会費	980,000	1,160,000	△ 180,000	
法人会費	560,000	600,000	△ 40,000	59社
個人会費	420,000	600,000	△ 180,000	526人
共催金等	0	0	0	
寄付金	0	0	0	
雑収入	12	12	0	
前年度繰越金	849,985	1,361,608	△ 511,623	
合計	1,829,997	2,561,620	△ 731,623	

2 支出の部(案)

2025年度予算案

(単位:円)

	予算額 (A)	2024年度 予算額 (B)	増減 (A-B)	備考
研究会補助	200,000	200,000	0	研究会活動費
講師準備金	0	50,000	△ 50,000	講演会
講師旅費謝金	250,000	100,000	150,000	講演会
地方交流会派遣費	100,000	150,000	△ 50,000	県内、県外
諸団体会費	20,000	20,000	0	いわて産業振興センター
高校物理部会交流助成費	0	50,000	△ 50,000	物理部会
子ども科学教室補助	0	40,000	△ 40,000	子ども科学館 チャレンジサイエンス
交流会補助	80,000	20,000	60,000	講演会等
会場費	50,000	50,000	0	冬季講演会
会議費	120,000	120,000	0	企画会議
印刷費	0	300,000	△ 300,000	INSレポート他
通信費	50,000	50,000	0	総会案内
交通費	150,000	30,000	120,000	貸切バス等
アルバイト料	0	60,000	△ 60,000	事務補助
事務費	10,000	10,000	0	振込手数料
若手活動支援費	50,000	300,000	△ 250,000	若手企画委員会活動費他
広報費	50,000	300,000	△ 250,000	WEBメンテ
会費徴収システム	90,000	0	90,000	会費ペイ
予備費	609,997	809,382	△ 199,385	
合計	1,829,997	2,659,382	△ 829,385	

研究テーマの紹介

- 宇井 幸一 岩手大学理工学部 化学コース kui@iwate-u.ac.jp
次世代二次電池の研究開発・二次電池，室温イオン液体を用いる金属・合金の電析に関する研究・室温イオン液体，泳動電着法を用いる機能性材料膜の作製と応用・泳動電着法，エネルギー変換技術研究会代表幹事
- 芝崎 祐二 岩手大学理工学部 化学コース yshibasa@iwate-u.ac.jp
プラスチック，熱硬化性樹脂，光学樹脂，接着樹脂，ポリマー研究会代表幹事
- 土岐 規仁 岩手大学理工学部 化学コース doki@iwate-u.ac.jp
結晶工学，化学工学，機能性結晶
- 八代 仁 岩手大学 名誉教授（理工学部 化学コース） yashiro@iwate-u.ac.jp
腐食・防食，燃料電池，リチウムイオン電池，PEM 形水電解，セパレータ，岩手県リン資源地産地消研究会会長
- 尾崎 拓 岩手大学農学部 生命科学科 tozaki@iwate-u.ac.jp
糖化ストレスに対するミトコンドリアの防御機構の解明，ミトコンドリアに局在するタンパク質分解酵素カルパインの機能の解明，タンパク質間相互作用を標的とする中分子ペプチド医薬の開発，レビー小体型認知症に対する点鼻薬の創製，萎縮型加齢黄斑変性に対する点眼薬の創製
- 平塚 真人 岩手大学理工学部 材料科学コース hiratsuka@iwate-u.ac.jp
鋳鉄の高強度化・高機能化に関する研究
- 吉本 則之 岩手大学理工学部 材料科学コース yoshimoto@iwate-u.ac.jp
放射光を使った材料の評価，機能材料の構造評価，有機材料の結晶成長
- 長田 洋 岩手大学理工学部 電気電子・情報通信コース osada@iwate-u.ac.jp
温度の計測・制御技術に関する研究，ZnO 系デバイスに関する研究
- 高木 浩一 岩手大学理工学部 電気電子・情報通信コース takaki@iwate-u.ac.jp
電磁エネルギー，静電気，電気工学，パルスパワー，プラズマ
- 内舘 道正 岩手大学理工学部 機械知能航空コース uchidate@iwate-u.ac.jp
表面粗さ，摩擦・摩耗・潤滑，トライボロジー，射出成形，シミュレーション
- 小野寺 英輝 岩手大学理工学部 機械知能航空コース hideki@iwate-u.ac.jp
大型風車の振動，小型風車の効率，技術社会史
- 柴田 貴範 岩手大学理工学部 機械知能航空コース tshibata@iwate-u.ac.jp
脱炭素時代に向けた未来の航空エンジン、発電システム，ターボ機械の高性能化、静粛化
- 西村 文仁 岩手大学理工学部 機械知能航空コース nis@iwate-u.ac.jp
形状記憶合金の変形挙動のモデル化と数値シミュレーション，CAE を用いた金型最適設計手法の開発，海洋と社会研究会会長，デジタルエンジニアリング研究会会長
- 水野 雅裕 岩手大学（理工学部 機械知能航空コース） m.mizuno@iwate-u.ac.jp
硬脆材料の切断技術，金型研磨技術，超砥粒研削ホイールのツルーイング

- 南 正昭 岩手大学理工学部 社会基盤・環境工学コース minami@iwate-u.ac.jp
交通システム計画、都市空間解析、防災交通計画、交通網のバリアフリー化
- 山本 英和 岩手大学理工学部 社会基盤・環境工学コース yamamoto@iwate-u.ac.jp
常時微動を利用した地下構造探査法の開発、岩手県の地震危険度評価に関する研究、地盤の地震動増幅特性(ゆれやすさ)の評価、地盤と防災研究会会長
- 小山 猛 岩手大学理工学部 機械知能航空コース koyama@iwate-u.ac.jp
池や海における水中ロボティクス、小学生からのロボット教育やプログラミング教育
- 伊藤 幸男 岩手大学農学部 森林科学科 sachii@iwate-u.ac.jp
森林の持続的管理と循環利用、木材の生産と消費の構造、木質バイオマス利用の制度・政策
- 喜多 一美 岩手大学（農学部 動物科学科） kitak@iwate-u.ac.jp
飼料、ニワトリ、アミノ酸、糖化反応、サイレージ
- 三浦 靖 岩手大学農学部 シンクレスト株式会社 共同研究講座 シン・フードラボ mako@iwate-u.ac.jp
食品新素材の開発、新規な食品加工・保蔵法の開発、新規な食品品質評価法の開発
- 中島 清隆 岩手大学人文社会科学部 地域政策課程 knakashi@iwate-u.ac.jp
エネルギーシフト・ヴェンデ(大転換)による持続可能な地域社会形成の環境エネルギーガバナンス政策研究
- 木村 毅 岩手大学研究推進機構 研究基盤管理・機器分析部門 kimura@iwate-u.ac.jp
フタロシアン、ポルフィリン、フェナントロリン錯体等の機能性色素の合成と機能評価に関する研究
- 大石 好行 岩手大学分子接合技術研究センター yoshiyu@iwate-u.ac.jp
機能性高分子材料の創製に関する研究：低誘電率&低誘電正接樹脂、高屈折率樹脂、高接着性樹脂、高耐熱性樹脂、高熱伝導性樹脂、炭素繊維強化樹脂、ポリマー研究会会長
- 船崎 健一 八戸工業大学（岩手大学 名誉教授） funazaki@iwate-u.ac.jp
航空エンジンやロケットエンジンの高効率化、高信頼性化、ターボ機械の高性能化、静粛化、流体力学や伝熱工学に関する実験的手法・最適化手法、探求学習の進め方に関する指導
- 吉田 等明 岩手大学 名誉教授（教育学部 技術教育科） hitoaki@iwate-u.ac.jp
自家用車の自動運転に必須となる「車載ネットワーク」の安全を守るための製品を、AI の応用技術で開発中
- 阿部 昭博 岩手県立大学ソフトウェア情報学部 abe@iwate-pu.ac.jp
情報システムデザイン、地域情報化、地理情報システム（GIS）、観光情報学、地域と情報システム研究会会長
- 山本 健 岩手県立大学 総合政策学部 t-yama@iwate-pu.ac.jp
ファイナンス、食と観光による地域活性化
- 本間 義章 岩手県立産業技術短期大学校水沢校 生産技術科 yoshi@iwate-it.ac.jp
PLC による機械制御ネットワークシステムの機能展開設計と自動機製作、5 源主義手法と品質保証技術による生産効率向上の実践的手法の研究

- 西崎 滋 放送大学岩手学習センター nisizaki@iwate-u.ac.jp
原子核構造の研究、高密度核物質の研究、原子力発電のリスク
- 遠藤 治之 岩手県工業技術センター 機能材料技術部 haru-endo@pref.iwate.jp
ZnO, MgZnO, UV フォトダイオード, 圧力センサ, MEMS
- 佐々木 昭仁 岩手県工業技術センター 電子情報システム部 teruhito-s@pref.iwate.jp
リサイクル（リン資源循環システムの研究）、分析化学（無機元素分析、ICP 発光分光分析）、環境化学、電気化学、無機工業化学に係る県内企業支援、岩手県リン資源地産地消研究会代表幹事
- 紺屋 博昭 熊本大学大学院人文社会科学部 konya@kumamoto-u.ac.jp
雇用法／労働法、地域雇用政策、雇用構築学、若者の就労就業支援、企業向け人事マネジメント
- 佐々木 剛 東京海洋大学 t-sasaki@kaiyodai.ac.jp
関係価値、伝統的生態的知識、Nature Contributions to People 自然の人間への寄与、森里川海
連関、関係価値研究会会長
- 石塚 悟史 高知大学次世代地域創造センター zuka@kochi-u.ac.jp
産学官民連携プロジェクトの企画・立案・推進、地域社会の諸活動に対する専門的支援（まちづ
くり、地域政策など）
- 千葉 正克 大和大学理工学部 機械工学専攻 chiba.masakatsu@yamato-u.ac.jp
航空宇宙構造動力学、流体関連振動

INS 研究会一覧

No	研究会	会長
1	エネルギー変換技術	山田 弘 岩手大学 名誉教授
2	宇宙航空	船崎 健一 八戸工業大学 学長
3	ポリマー	大石 好行 岩手大学分子接合技術研究センター
4	海洋と社会	西村 文仁 岩手大学 理工学部
5	環境リサイクル	佐藤 徳行 岩手県 環境保健研究センター 副所長
6	デジタルエンジニアリング	西村 文仁 岩手大学 理工学部
7	地域と情報システム	阿部 昭博 岩手県立大学ソフトウェア情報学部
8	いわて金型	浅沼 和彦 株式会社パワージェクト東北工場
9	マーケティング	石川 安則 E&IT 技術士事務所
10	いわて水素社会	山口 明 岩手大学 理工学部
11	起業化	古澤 眞作 NPO 未来図書館
12	雇用	紺屋 博昭 熊本大学大学院人文社会科学研究部
13	男女共同参画推進	海妻 径子 岩手大学 副学長
14	いわてコーディネート	小山 康文 TOLIC
15	地元食	菅原 悦子 岩手大学 名誉教授
16	岩手県リン資源地産地消	八代 仁 岩手大学 名誉教授
17	発酵	工藤 朋 株式会社わしの尾
18	グローバル産業戦略	岩渕 拓也 セルスペクト株式会社
19	SDGs	横溝 賢 札幌市立大学
20	関係価値	佐々木 剛 東京海洋大学
21	シニアエキスパート人材活用	藤代 博之 岩手大学 名誉教授
22	エネルギー・エージェンシーいわて	吉澤 正人 岩手大学 名誉教授

INS エネルギー変換技術研究会

【役員】

会 長	山田 弘	岩手大学 名誉教授
幹 事	大平 尚	東北 ILC 事業推進センター 事務局長
幹 事	高橋 修三	公益財団法人釜石・大槌地域産業育成センター 海洋エネルギー産業化コーディネーター
幹 事	門磨 義浩	八戸工業高等専門学校 マテリアル・バイオ工学コース
幹 事（事務局）	宇井 幸一	岩手大学 理工学部

【趣旨】

現在、エネルギー源として、石油等の化石燃料が用いられている。しかし、エネルギー変換技術を用いることにより、エネルギーの多用化、大気汚染の軽減、二酸化炭素の排出量の低減、さらに、電力需要の平準化等が可能となる。例えば、ウインドファームや太陽光発電のような再生可能エネルギーは、エネルギー自給率の向上や地球温暖化防止に貢献するだけでなく、分散型エネルギーシステムとしても期待できる。また、運輸部門における石油依存度を低減し、多様なエネルギーでかつ低環境負荷で走行することができる電気自動車やハイブリッド自動車等の次世代クリーンエネルギー自動車の開発・普及を期待できる。

そこで本研究会では、各種携帯機器、自動車用電源もしくは発電等に利用できる、電気化学システムを用いる『化学エネルギー電気エネルギー変換』、無尽蔵に得られる太陽エネルギーを利用する『光エネルギー電気エネルギー変換』、電力輸送に関連する『交直変換等のエネルギー変換』に関するテーマを取り扱うことにする。現状の問題点を広く把握するとともに、新規な変換システムの創造やエネルギー変換の高率化を目的とする。

【事業】 令和6年度（2024年度）は主な事業として、以下の共催事業を実施した。

○ 第5回 SPERC イオン液体講演会(兼 第45回研究会および第9回岩手大学電気化学セミナー)

主 催： 岩手大学理工学部附属ソフトパス理工学研究センター（SPERC）
水素利用技術研究グループ イオン液体サブグループ

共 催： INS エネルギー変換技術研究会

協 賛： 日本化学会東北支部，電気化学会東北支部

日 時： 令和7（2025）年1月22日（水）15：00～16：00

場 所： 理工学部5号館（C13） 南棟2階200号室（〒020-8551 岩手県盛岡市上田4-3-5）

講演者： 博士（工学） 布村順司 氏（(株)UACJ マーケティング・技術本部 R&D センター）

題 目：「アルミニウムのリサイクルにおける現状と課題」

参加者： 67名



竹ログループリーダーによる紹介



布村氏の講演



講演風景

I N S ポリマー研究会

■組織

会長	大石 好行	(岩手大学分子接合技術研究センター)
副会長	芝崎 祐二	(岩手大学理工学部)
幹事	田口 好弘	(株式会社 The IT Lab)
	鈴木 一孝	(岩手県工業技術センター)
	佐々木英幸	(岩手大学分子接合技術研究センター)
	塚本 匡	(岩手大学理工学部)
会員数	40名	

■目的

機能性および高性能高分子材料に関する講演会、情報交換および共同研究などをおして独創的な素材や技術を開発し、さらに新たな産業の育成を目指して活動する。

■対象とする分野

高性能高分子材料、機能性高分子材料、高分子複合材料など

■令和6年度の活動

第187回研究会<次世代半導体パッケージに関するセミナー>

日時：令和6年5月16日（木）14:00～18:10

会場：オンライン

講演：1. 「AI 製品による認証プロセスおよび設計事例」

元 UL Solutions Taiwan

陳 立関

2. 「先端的な半導体 3D パッケージング技術の現状と今後の展開」

国立台湾科技大学 客員教授（元鴻海精密工業）

頼 文政

3. 「半導体パッケージ材料の開発動向」

味の素ファインテクノ（株）研究開発部

依田 正応

第188回研究会<次世代高速通信に対応した高周波基板材料に関するセミナー>

日時：令和6年6月28日（金）13:00～17:15

会場：オンライン

講演：1. 「半導体関連基板の技術動向」

FICT（株）経営企画本部

杉本 薫

2. 「高速通信向け基板材料の開発」

太陽インキ製造（株）技術開発センター

仲田 和貴

3. 「次世代パッケージ向け高信頼性・低誘電基板材料の開発」

住友ベークライト（株）情報通信材料研究所

小俣 浩

4. 「日本化薬における低誘電樹脂の開発」

日本化薬（株）ファインケミカルズ研究所

本多 理沙

第189回研究会<半導体基板に関するセミナー>

日時：令和6年8月28日（水）14:00～18:10

会場：オンライン

講演：1. 「半導体サプライチェーンにおいて鍵となる力～第三者認証試験～」

宜特科技（IST）故障解析エンジニアリング部門

沈 士雄

2. 「先端半導体パッケージに向けたレゾナックの取り組み」

（株）レゾナック パッケージングソリューションセンター 小野関 仁

第190回研究会<次世代半導体パッケージに関するセミナー>

日時：令和6年10月18日（金）14:00～18:20

会場：オンライン

- 講演：1. 「半導体パッケージング用導電材料～ペースト、接着剤、ソルダーレジスト～」
 国森企業股份有限公司 開発部 張 豊哲
2. 「ディスプレイ光学接着剤および半導体プロセス用テープ接着剤」
 南寶先進材料股份有限公司 マーケティング部 林 億昌
3. 「三菱ケミカルの半導体向け材料・次世代通信向けフィルム」
 三菱ケミカル（株）機能性エレクトロニクスグループ 加藤 知希
 三菱ケミカル（株）半導体&電池アプリケーショングループ 西田 怜
 （株）新菱 ウエハデバイス本部 尾前聡一郎
 三菱ケミカル（株）
 スペシャリティフィルムズテクノロジーセンター 鈴木 星冴

第 191 回研究会＜次世代半導体パッケージに関するセミナー＞

日時：令和 6 年 12 月 13 日（金）14:00～18:00

会場：オンライン

- 講演：1. 「半導体パッケージ：汎用人工知能（GAI）時代の異種チップ集積技術」
 SiPlus 代表取締役兼 CEO 胡 迪群
2. 「東レの半導体関連材料」
 東レ株式会社 シニアフェロー 富川真佐夫

第 192 回研究会＜半導体基板材料に関するセミナー＞

日時：令和 7 年 2 月 5 日（水）13:00～17:00

会場：岩手大学地域協創推進棟 2F セミナー室およびオンライン (Zoom)

- 講演：1. 「半導体パッケージの最近の動向」
 新光電気工業（株）開発統括部 設計技術開発部 井原 義博
2. 「ポリマー光導波路の光電融合への応用」
 慶應義塾大学 理工学部 石橋 崇明
3. 「5G/6G 時代の高周波基板向けビニル系低誘電損失材料の開発」
 川辺高分子研究所 代表 川辺 正直
4. 「三井化学が取り組む次世代半導体材料の開発」
 三井化学（株）ICT ソリューション事業本部 稲田 智志

I N S 海洋と社会研究会 令和6年度活動報告

I 活動方針

- ・東日本大震災からの復興のその先を見据え、産学官連携の拡充を図るため、研究会活動を沿岸全域に拡大する。
- ・岩手大学釜石キャンパス設置を契機とし、活動のさらなる展開に向けて、岩手大学や自治体との連動した体制と活動内容を推進する。

II 運営体制

- ・研究会活動を沿岸全域に拡大し、久慈市、宮古市及び大船渡市の関係者の研究会入会を促進する。
- ・役員を刷新し、久慈市、宮古市及び大船渡市の関係者の参画を働きかける。
- ・事務局は、岩手大学三陸水産研究センターに置く。

III 役 員（令和6年度現在）

会 長 岩手大学理工学部 教授 西村 文仁

幹 事 岩手大学研究支援・産学連携センター 特任教授 高橋 浩進
岩手大学三陸水産研究センター 客員教授 田村 直司

IV 会員数 10名 募集中（入会希望者は幹事田村 mail:tamura@iwate-u.ac.jp まで申込みください。）

V 令和6年度活動実績

1 I N S 研究会地域フォーラムの開催

I N S 各研究会の研究開発の関係者及び会員相互の情報の交流を活発化することを目的に釜石市や岩手大学三陸水産研究センターと共催で開催した。

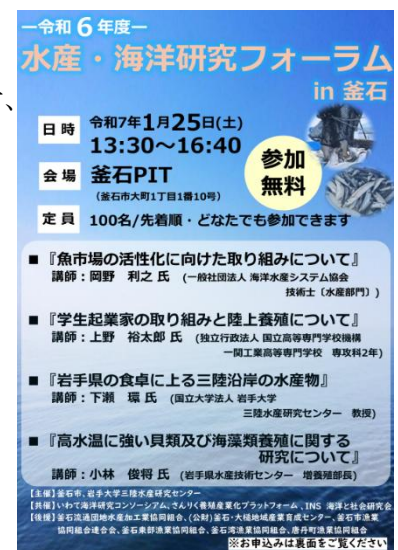
【会場の様子】



【②一関工業高等専門学校 上野氏講演】



開催日及び場所	内 容
日時:令和 7 年 1 月 2 5 日 (土) 13:30～ 16:40 場所: 釜石情報 交流センター PIT(釜石市大町 1 丁目 1-10)	1 主催・共催・後援 (1) 主催 釜石市、岩手大学三陸水産研究センター (2) 共催 いわて海洋研究コンソーシアム、さんりく養殖産業化プラットフォーム、INS 海 洋と社会研究会 (3) 後援 釜石流通団地水産加工業協同組合、(公財) 釜石・大槌地域産業育成センター、 釜石市漁業協同組合連合会、釜石東部漁業協同組合、釜石湾漁業協同組合、唐丹 町漁業協同組合 2 講演 【講師①】発表 4 0 分 質疑 1 0 分 13:40～14:30 「魚市場の活性化に向けた取り組みについて」 一般社団法人海洋水産システム協会 技術士〔水産部門〕 岡野 利之 氏 【講師②】発表 4 0 分 質疑 1 0 分 14:30～15:20 「学生起業家の取り組みと陸上養殖について」 独立行政法人 国立高等専門学校機構 一関工業高等専門学校 専攻科 2 年 上野 裕太郎 氏 【講師③】発表 3 0 分 質疑 5 分 15:30～16:05 「岩手県の食卓に上る三陸沿岸の水産物」 国立大学法人岩手大学 三陸水産研究センター 下瀬 環 教授 【講師④】発表 3 0 分 質疑 5 分 16:05～16:40 「高水温に強い貝類及び藻類養殖に関する研究について」 岩手県水産技術センター 小林 俊将 増養殖部長 3 参加者 48 名 4 今後の課題 (1) 右図の開催チラシを配布したが、市内の漁業者、 漁協関係者の参加が少なかったことから、次年度 は各漁協等から聞いてみたいテーマを予め募集し、 多く参加してもらえる内容を検討する。 (2) 今回は中学生や高校生の参加があったことは 良かったが、開催曜日や開催方法（オンラインの 有無）について関係機関とともに検討する。



環境リサイクル研究会

【研究会の目的】

岩手県の豊かな環境を生かした資源循環社会と環境共生型産業の創生に向けて、資源リサイクル、カーボンニュートラル等の情報、研究交流を進める。

【令和6年度の組織】

会員数：110名

会 長：佐藤 徳行（岩手県環境保健研究センター副所長）

代表幹事：晴山 渉（岩手大学理工学部）

幹 事：

佐藤 崇（ニッコー・ファイメック株式会社）

佐々木秀幸（環境省東北地方環境事務所）

山内 潤（エヌエス環境株式会社）

成田 雄氣（岩手県環境生活部資源循環推進課）

坂本 宏行（株式会社大東環境科学）

吉田 幸司（岩手県環境生活部環境生活企画室）

南部 智成（株式会社環境アシスト）

小野寺健杜（岩手県ふるさと振興部科学・情報政策室）

鈴木 行弘（一般社団法人 計量計測技術センター）

佐々木昭仁（岩手県工業技術センター）

高橋 修三

須藤 裕太（岩手県工業技術センター）

【令和6年度研究会活動報告】

(1) 第1回幹事会

日時：令和6年4月22日(月)18:30～20:00

会場：岩手大学理工学部第三会議室

(2) 第34回研究会講演会

日時：令和6年7月13日（土） 13:00～17:00

会場：岩手大学理工学部 みらいAIOホール(旧テクノホール、岩手県盛岡市上田4-3-5)

およびZOOMを用いたオンラインによるハイブリッド開催

次第：1 開会（13:00）

2 会長あいさつ（13:00～13:05）

3 講演（※講演時間は、質疑応答時間を含む）

1)【基調講演】 鉾山廃水処理へのパッシブトリートメントの適用（13:05-14:05）

東北大学大学院環境科学研究科 教授 井上 千弘 氏

2)(オンライン) 能登半島地震における現状と災害廃棄物の処理（14:05-14:50）

環境省 中部地方環境事務所資源循環課 課長補佐 山際 勝治 氏

3)廃棄物・金属リサイクル・汚染土壌業界の現状と環境事業会社のあるべき姿（15:00-15:45）

エコシステムジャパン(株) 代表取締役 辻本 健二 氏

4)環境測定分析業界の半世紀、現状および展望（15:45-16:30）

一般社団法人日本環境測定分析協会 会長

エヌエス環境株式会社 取締役執行役員 技術本部長 小野寺 明 氏

5)青森・岩手県境不法投棄現場の原状回復について（16:30-17:00）

岩手県花巻保健福祉環境センター 主査（前 環境生活部廃棄物特別対策室 主任）

吉田 敬幸 氏

4 閉会（17:00）

5 交流会（17:30-19:30） 会場：タケ坊主（盛岡市高松 1-12-5）

参加者：講演会 54 名（会場参加：41 名、オンライン参加 13 名）、交流会 27 名



(3) 第 7 回研究会勉強会

日時：令和 7 年 2 月 15 日(土) 13:30～16:45

会場：岩手大学復興祈念銀河ホール

講師：(元)岩手県環境保健研究センター・岩手県工業技術センター 菅原 龍江 氏

(元)岩手県環境生活部環境担当技監・(現)環境省東北地方環境事務所 佐々木 秀幸 氏

日程：13:30～13:35 INS 環境リサイクル研究会会長挨拶

13:35～14:35 「環境技術との出会い」講演 菅原 龍江 氏

14:35～15:05 質疑・討論・相談①

15:15～16:15 「岩手の廃棄物行政について思うこと」講演 佐々木 秀幸 氏

16:15～16:45 質疑・討論・相談②

17:15～19:15 交流会(いちよし、盛岡市上田 2-16-3)

参加者：講演会 35 名(会場参加 33 名、オンライン参加 2 名)、交流会 14 名



(4) 第 2 回幹事会

日時：令和 7 年 1 月 27 日(月)18:30～20:00

会場：岩手大学理工学部 6 号館 104 室

【連絡先】

岩手大学理工学部社会基盤・環境工学コース

晴山 渉

〒020-8551 岩手県盛岡市上田 4-3-5

E-mail : harewata@iwate-u.ac.jp

電話&FAX 019-621-6947

地域と情報システム研究会活動報告

【運営体制】

会長 阿部昭博（岩手県立大学ソフトウェア情報学部）
幹事 南野謙一（岩手県立大学ソフトウェア情報学部）
幹事 富澤浩樹（岩手県立大学ソフトウェア情報学部）
幹事 田中裕也（Badass/いわて産業振興センター）
会員数 約 30 名

【趣旨】 本研究会は、地域に密着した情報システム・情報化の在り方について産官学で意見交換できるオープンコミュニティを目指して発足しました。現在の重点テーマは下記の通り。

1. 「地域×SDGs×ICT」に関する事例や研究成果を共有する
2. AI をはじめとする ICT の急速な進展を踏まえつつ、人間中心の情報システムの在り方を共に考える
3. その他、上記に関連する地域情報化の諸問題について調査研究する

【2024 年度活動実績】 ※詳細は研究会ホームページに掲載

第 23 回研究会

共催：観光情報学会いわて観光情報学研究会、IT コーディネータ岩手

日時：2025 年 3 月 6 日（木） 14:00～17:30

場所：岩手県立大学アイーナキャンパス学習室 1（ハイブリッド開催）

概要：第 1 部：地域と情報に関する話題提供 7 件

第 2 部：中小企業のデジタル化推進と人材育成

ものづくり企業が取り組む地域のデジタル人材育成

協同組合 IT ソリューションサービス/㈱興縁代表 阿部拓磨

製造業向けデジタル人材育成講座が目指すもの

いわて産業振興センターDX コーディネータ/㈱Badass 代表取締役 田中裕也

デジタル化推進の伴走支援人材～IT コーディネータが果たすべき役割

岩手県立大学ソフトウェア情報学部教授 阿部昭博

【照会先】 URL <https://sites.google.com/view/iwatens-is/>
Email ins-is-board@ml.si.soft.iwate-pu.ac.jp

令和6年度INSマーケティング研究会活動報告

◎令和6年度第1回INSマーケティング研究会 in 花巻

○目的 光技術関連の産学官連携による新たな新事業創出を図る

○日時 令和7年3月28日（金）14：00～16：30

○場所 花巻市起業化支援センター（花巻市二枚橋5-6-3）

○内容

・14：00～14：50

「メカニカルフリー液晶レンズの研究開発」

講師 秋田大学大学院理工学研究科 数理・電気電子情報学専攻

教授 河村希典 先生

・14：55～15：25

「固体レーザを用いた薄膜半導体形成技術、ならびに有機ELに関する課題提供」

講師 岩手大学ものづくり技術研究センター 特任教授 田邊 浩 先生

・15：30～16：00

「PSIR カメラ開発について」

講師 株式会社三井光機製作所 開発部長 高嶋茂樹 様

・16：00～16：30

「製品の外観検査を自動化する検査AIの学習データをデジタルツイン技術により自動生成するシステム」

講師 バイスリープロジェクト株式会社 代表取締役 菅野 直 様

○主催 INS マーケティング研究会

○共催 一般社団法人ビジネスサポート花巻、岩手大学花巻サテライト

令和6年度INS起業化研究会活動報告

◎令和6年度第1回INS起業化研究会 in 岩手大学

○目的：これから産学官連携に関わる方々に参考になる経営学から見た考え方、実際の事例など紹介し、職業として確立できるにはどのような取り組みが必要か考えていきます。

○日時：令和7年3月25日（火）15：30～17：00

○会場：岩手大学 盛岡市産学官連携研究センター コラボMIU

○内容：・講演1「起業・企業支援の実践－

これからを担う人たちへのエール－」

講師 実践女子大人間社会学部現代社会学科教授 吉田雅彦 先生

・講演2「実際の産学官連携支援手法として1考察 ～翻訳機能～」

講師 SBIM 代表 佐藤利雄

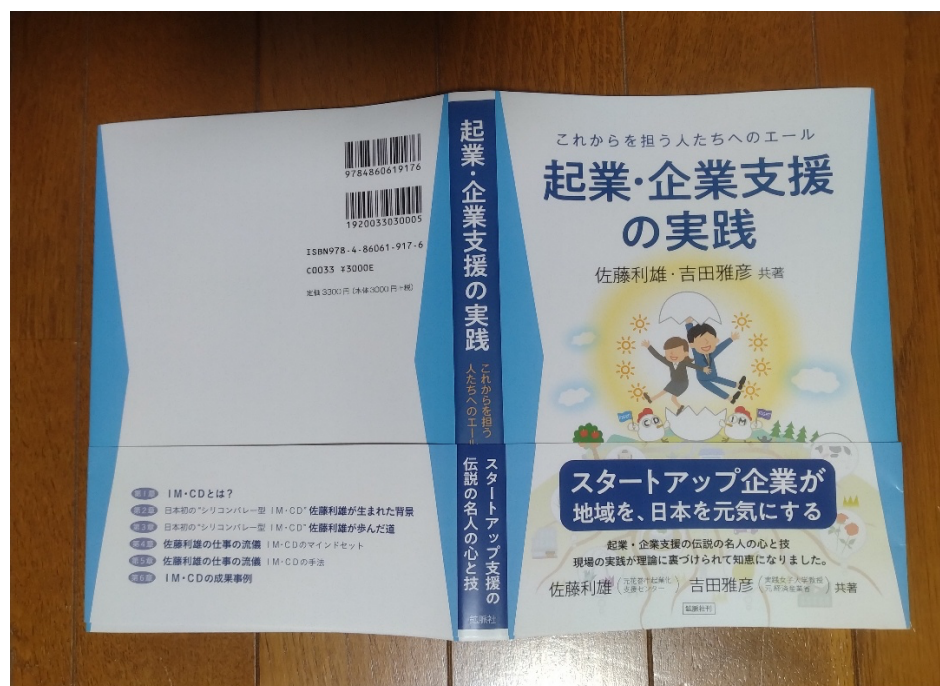
（岩手大学研究支援・産学連携センター客員教授）

・総評・今後の進め方など

岩手大学研究支援・産学連携センター 教授 今井 潤 先生

○主催 INS 起業化研究会

○共催 岩手大学研究支援・産学連携センター



令和6年度INS雇用研究会活動報告

コロナの落ち着きに合わせ経済活動が活発化、そのため労働力不足が顕著になっています。定年退職者の継続雇用や女性の職域拡大も進んではいますが、労働力不足は深刻です。今回のセミナーでは、第三の雇用として外国人雇用の新たな取り組みについて、産学官が連携して取り組むシステム概要をご紹介します。

◎令和6年度第1回 INS 雇用研究会 in 北上

○日時 令和6年6月19日（水）15:00～17:00

○会場 おでんせプラザぐろーぶ 4階403号室
八戸工業大学北上サテライトオフィス

◎令和6年度第2回 INS 雇用研究会 in 八戸

○日時 令和6年6月28日（金）15:00～17:00

○会場 八戸工業大学 番町サテライトキャンパス
青森県八戸市番町9-5 協栄八戸番町ビル 1階

◎令和6年度第3回 INS 雇用研究会 in 奥州

○日時 令和6年12月4日（水）14:00～16:00

○会場 奥州市鑄物技術交流センター

○内容 第1回、第2回、第3回共通

「八戸工業大学 特定技能エンジニアプログラム（HITSB）について」

※HITSB（商標登録出願：商願2023-128788）

特定技能1号外国人候補生を企業が受入れる前に、八戸工業大学で半年間研修など行い、日本で特定技能1号評価試験合格させ、さらには特定技能2号評価試験合格も目指すシステムです。

今回は、工業製品製造分野（機械金属加工、電気電子機器組み立て）について説明を行います。

- ・説明者 （株）TSB・ケア・アカデミー 代表取締役社長 中澤 司 氏
八戸工業大学 学長補佐 教授 金子 賢治

* 令和6年4月受け入れいたしました、建設分野、自動車整備分野（3級自動車整備士相当）の入校式につきまして、下記のURLで紹介されました。

<https://www.toonippo.co.jp/articles/-/1762488>

○主催：INS 雇用研究会

○共催：八戸工業大学

INSいわてコーディネート研究会 令和6年度活動報告

令和7年5月

設置目的： (設置：平成25年7月) 会員登録料：無料

研究・技術開発から事業化までを一貫支援するという理念の下、RSP事業（H8～H16）で設置されたコーディネート研究会の活動は、北上川流域産業クラスター形成（H17～H20）、地域中核産学官連携拠点支援（H21～H24）に引き継がれ、組織の枠を超えて産学官連携支援者間の情報・ノウハウの共有、スキルアップ、シーズとニーズのマッチング、研究開発資金への橋渡しとその事業化などに取り組み、成果を挙げてきた。今回、これまでの活動を一層拡充させ、県内外関係者と濃密なネットワークを形成することで、東日本大震災津波からの開かれた復興と大学等を核とする国際的なイノベーションパークの形成に資する。

役員 会長：小山康文（いわて産業振興センター） 代表幹事：上野山英克（岩手県立大学）

幹事（11名）：阿部茂（岩手県）、稲垣秀悦、今井潤（岩手大学）、小野寺純治（イノベーションラボ岩手）、貫洞義一（岩手大学）、佐々木建二（岩手医科大学）、佐藤利雄（シニアビジネスインキュベーションマネージャーSBIM）、鈴木功、田澤潤（いわて産業振興センター）、富手壮一、古澤眞作（未来図書館）

会員数：87名（令和7年5月1日現在）

・幹事会

令和6年5月9日（木）18時 すゞ禅グループ「魚きんた」 参加者8名

・第5回総会

令和6年5月25日（土）10:00 コラボMIU会議室（中会議室・小会議室2） 会場32名
報告及び協議

- (1) 令和5年度活動報告
- (2) 令和6年度活動計画（案）

・第20回 INS いわてコーディネート研究会

令和5年5月25日（土）10:15 コラボMIU会議室（中会議室・小会議室2） 会場32名

1. 岩手大学 研究支援・産学連携センター 副センター長・教授 今井 潤 様
「産学官連携による人材育成の取り組み」
2. 岩手県立大学 研究・地域連携室 上席産学公連携コーディネーター 上野山 英克 様
「岩手県立大学の企業学群構想」
3. 岩手医科大学附属病院 病院事務部病院総務課 業務支援係長 佐々木 建二 様
「岩手医科大学研究開発・共創センターの紹介」
4. 意見交換
5. 会員からの情報提供
 - (1) いわて産業振興センター 産学連携部 課長 三上 敏広 様
「AMED 令和6年度医工連携イノベーション推進事業（地域連携拠点自立化推進事業）」
 - (2) ルジェネンス合同会社 代表 伊藤 かおる 様
「自己紹介と事業紹介」

以上

地元食の研究会 2024年度活動報告

テーマ「岩手ならではの食文化を次代へ引き継ぎ、持続可能な地域に」

本年度は、第42回から第44回まで3回の研究会を開催した。昨年度に続き盛岡市津志田野田地区をフィールドに食材に着目した農業体験を実施した。地域ならではの食材の魅力と価値の高さを再認識するとともに、農業が抱える課題や今後について、生産者とともに考えた。第44回は、民俗学的視野で地元食について考えた。この間、報告書を3回発行した。

●第42回“盛岡ブランドのサトイモ「津志田芋」を育て、味わおう！”

2024年4～10月 盛岡市津志田野田地区 参加者10人

盛岡市津志田野田地区の農地で半年間にわたり、地元生産者の支援のもと、「津志田芋」と呼ばれる盛岡ブランド認証のサトイモの栽培に取り組んだ。収穫の喜びとともに独特の食味を育む地域の魅力と生産者の努力に触れる事ができた。一方、市街化や高齢化によって栽培地や生産者が減少を続ける厳しい現状も目の当たりにした。

《栽培の歩み》

- 4月 8日（月）種芋の芽出作業
- 4月 29日（日・祝日）種芋の植え付け
- 6月 30日（日）マルチ外し、追肥、土寄せ
- 7月 26日（金）草取り、追肥、土寄せ＝雨で中止
- 7月 31日（水）草取り、追肥、土寄せ
- 8月 29日（木）3回目追肥
- 10月 12、19、26日（土）収穫



マルチを外した後、株の間に肥料をまいていく研究会メンバー
野田地区
2024年6月30日 盛岡市津志田

●第43回「津志田芋」大収穫祭

2024年11月30日（土）盛岡市・野田自治公民館 参加者11人

生産者を交えて定番の芋の子汁のほか、ずぼ芋などの地元食を調理。新米とともに味わいながら出来秋に感謝した。さらに、盛岡ブランドとしての津志田芋の今後についても活発に意見を交わした。

◇今季の生育、作柄について

適度に雨も降って順調に生育した。日照りに悩まされた昨季を大幅に上回る収穫量となった。

◇津志田芋の現状と今後について

【生産者】連作障害を避けるため、毎回作付け場所を変えている。狭い圃場のやりくりは大変。手間のかかる出荷作業が高齢化で難しくなっている。あと何年作り続けていけるか不安な状況が続いているが、津志田芋ならではの独特の食味を守っていききたい

GI認証 GI認証取得は生産組合の中でも意見が分かれている。耕作地が「野田地区」と限定されているので、他の津志田地域と連携できない。限られたスペースでのGI取得は難しい。津志田芋ならではの産品がないのに芋だけPRして続けていけるのか疑問も感じている。

【参加者】栽培面積が「狭い」ことを利点として捉え、後継の方法として「少ないものを絶やさない」姿勢で考えてもいいのでは？地域の中である程度稼げるのであれば（生産は）続く。本当は美味しいが、商品にしにくい「孫芋」を逆に高価な商品として販売する。料理人に「良さ」を広めてもらうのはどうか。

【生産者】食べ物にふさわしい価格があると思うと、高級化にはなかなか踏み切れない

【参加者】出荷までに手間がかかるのに市場価格が安い。津志田芋は二子いもに劣らずおいしい。価格を上げてもいいのではないかな。耕作地が少ないのであれば、高級ブランドとして販売する選択もあるのではないかな。価値や苦労を理解している人が高く買うという状況が広まればいい。株のまま販売して、収穫したばかりの状態を知ってもらい食べるまでの「手間を楽しむ」ことを売りにするなど、農家の苦労を伝える工夫も必要ではないかな。長い伝統を持つサトイモをジャガイモやサツマイモとの差別化でアピールする手段もある。サトイモ生産だけでは赤字だが、後継のためには農業全体として成り立つ方法を考えていくことが重要

【研究会アピール】

100年以上続く津志田芋栽培を、市民の誇りとして残していきましょう
秋にはみんなで食べられる。盛岡の芋の子会は“津志田芋でいものこ食い”

●第44回 講演「道具から探る岩手の食」

講師 (株)さわや書店外商部兼商品管理部 栗澤順一部長

2025年2月7日(金) 盛岡市・北ホテル 参加者12人

岩手大学生らによって実測された民具についてまとめた「若者たちと民具 モノは彼らに何を語ったか」(一芦舎発行)を基に民俗学的視野から岩手の食について考えた。

栗澤氏は、栃の実を食べていた人たちが使用していたと思われる皮むきの道具「栃むき」(江戸末期製作)などを例に「道具が廃れることは、その食べ物(料理)が食べられなくなるということ。道具の視点から『岩手の食』を見直すことも必要ではないか」と、指摘した。

自身の実家の食生活についても触れ、「昔、餅は(近隣住民らと共に)杵でついていた。それが電動の餅つき機を使い家庭内でつくようになると、近所に餅を配るというようなことをしなくなる」と振り返った。「道具が変わることで暮らしも変わる」と、社会生活に大きな影響を及ぼす道具の存在の大きさを強調した。

さらに、煮しめや、たくあんなど自家製の食べ物を持ち寄り、自宅に鍵もかけずに集まり茶飲みをしていた以前と、アボを取って自宅に鍵をかけて訪問する現代とのコミュニティのあり方を比較。以前のコミュニティを「曖昧な関係」と呼び、「中核にあったのは『食』。食が人と人を結びつけて関係を円滑にしていた」と分析した上で、「社会的なコミュニケーションの橋渡し役」としての「食」の重要性を強調した。

令和 6 年度 INS 岩手県リン資源地産地消研究会活動報告

【研究会の目的】

貴重なリン（P）資源の地域内循環を目指して、産学官金連携によるリンリサイクルの実現（実用化）を目指します。また、地域のリンリサイクルの機運醸成（セミナー・勉強会の開催）のほか、県内企業等の研究開発の取組、事業化を支援します。

【令和 6 年度の取組】

令和 6 年度の取組として、INS 環境リサイクル研究会と連携したセミナーの開催（共催/後援支援）のほか、これまで会長、幹事長の 2 名体制で運営して参りましたが、幹事 10 名により体制を強化しました。令和 7 年度から、新体制で活動をスタートします。

（令和 7 年度新体制）

会長	八代 仁	岩手大学名誉教授
幹事長	佐々木 昭仁	（地独）岩手県工業技術センター
幹事	熊谷 直昭	岩手大学名誉教授
幹事	脇原 将孝	東京工業大学名誉教授
幹事	堀田 昌宏	（地独）岩手県工業技術センター
幹事	杉山 潤	（公財）岩手県下水道公社
幹事	高橋 昭博	（国研）産業技術総合研究所東北センター
幹事	ほか 5 名	県内企業所属

【令和 6 年度の活動実績】

- ・ INS 環境リサイクル研究会（第 34 回研究会講演会）の後援
- ・ リンリサイクルに係る産学官連携会議

【連絡先】

INS 岩手県リン資源地産地消研究会事務局 担当
（地独）岩手県工業技術センター 電子情報システム部
佐々木 昭仁
〒020-0857 岩手県盛岡市北飯岡 2 - 4 - 2 5
代表電話 019-635-1115

令和 6 年度 INS SDGs 研究会活動報告

◎令和 6 年第 1 回 INS SDGs 研究会 in 北上開催

産学官連携を SDGs と連動させ、競争的資金獲得に向けた活動を推進するために、関係機関の情報収集と参加機関の連携を推進いたします。

今回は、青森、秋田、岩手の産学連携の事例紹介から、今後の広域連携の在り方など、意見交換できればと思って開催いたします。

○日時： 令和 7 年 2 月 10 日（月） 14：00～16：30

○場所： 八戸工業大学北上サテライトオフィス
北上駅前 おでんせプラザぐろーぶ 4 階 403 号室

○内容：

講演 1 JST 令和 4 年度 A-STEP トライアウト採択案件
「珪藻土が持つコケ植物の成長促進作用を活用した各種緑化技術の開発」について

（研究代表者）八戸工業大学工学部工学科生命環境科学コース
教授 鮎川恵理 先生

講演 2 「珪藻土や粃殻を用いた植物成長促進並びに食料増産技術」

（共同研究者）秋田大学 大学院理工学研究科理工学部
数理・電気電子情報学科数理科学コース
講師 村上英樹 先生

講演 3 「コケのインフラへの活用について ～温暖化対策としての提言～」

（共同研究者）遠野市 株式会社栄組代表取締役 佐々木栄洋 様

○主催：INS SDGs 研究会

○後援：八戸工業大学はちのへオープンイノベーションプラットフォーム
SDGs 研究会

個人会員名簿について

個人情報保護の観点から、**Reports of INS** に個人会員名簿を掲載することを取りやめております。個人会員名簿の閲覧を希望される方は、閲覧するのに必要な情報をお知らせいたしますので、INS 事務局までお問い合わせください。

なお、個人名簿は随時更新しておりますので、ご所属やご連絡先等の変更がございましたら、INS 事務局までお知らせください。

INS 事務局 (ins@iwate-u.ac.jp)

事務局

岩手大学研究支援・産学連携センター 内

TEL : 019-621-6491

FAX : 019-621-6892

E-mail : ins@iwate-u.ac.jp

事務局長

今井 潤 岩手大学研究支援・産学連携センター

発行 令和 6 年 5 月